

銃 砲 史 研 究

第 3 4 6 特 別 号

日本銃砲史学会の活性化を—理事長就任に際して—

中 原 正 二

シンポジウム

「日本の砲術—和流砲術から西洋流砲術へ」

シンポジウム「日本の砲術—和流砲術から西洋流砲術へ」

の開催について

板橋区立郷土資料館

砲術史からみた鉄砲の伝来

宇 田 川 武 久

大垣藩の田付流鉄砲流派について

安 田 修、峯 田 元 治、小 笠 原 信 夫

中島流とその砲術型

霜 禮 次 郎

森重流砲術

島 津 兼 治

幕末の大砲について—青銅の鑄造砲—

峯 田 元 治

西洋流砲術の導入とその終焉

小 西 雅 徳

鉄砲の材質と製作技法の自然科学的調査

斎 藤 努

平成 1 6 年 9 月

日本銃砲史学会編



日本銃砲史学会の活性化を — 理事長就任に際して —

中原 正 二

私は平成16年度から日本銃砲史学会の理事長に就任致しました。会員の皆様にはどうぞよろしくお願い申し上げます。

日本銃砲史学会は有馬成甫初代会長、安斎實第二代会長、所莊吉理事長（いずれも故人）など銃砲史関係ではカリスマ的人物によって創設、運営され、その機関誌である「銃砲史研究」はすでに346号に達しています。

本年2月21日、板橋区立ハイライフプラザいたばしで行なわれたシンポジウム「日本の砲術—和流砲術から西洋流砲術へ」では、講演者あるいはパネルディスカッションのパネラー及び司会・進行者7名中5名が当学会会員であり、他のお二方、宇田川武久先生と斎藤努先生も所属する機関の国立歴史民俗博物館が会員であります。

これも日本銃砲史学会の輝かしい歴史の一ページですが、当学会を無視しては、銃砲の歴史を論ずることは不可能である、ということがこれによっても伺えると思います。

勿論、この発展は日本ライフル射撃協会の財政面及び物心両面での長年にわたる多大の援助があったればこそ成り立ったのであって、深く感謝しております。

このように当学会は輝かしい歴史と実績を持つ学会ではありますが、最近になって会員の中から当学会に対する批判がしばしば聞かれるようになりました。特に昨年度には、その声が次第に大きくなり、査読を行なうべきだ、監査は不可欠だなどという具体的な意見が出てまいりました。

機関誌「銃砲史研究」では、多くの論文が限られた少数の会員の繰り返しの発表によって占められ、大多数の方はそれによってつつがなく学会が継続してゆくことに安心して、傍観してきたというのが実情ではないでしょうか。学会というよりは好事家の同好会という皮肉な見方も可能と思います。

たまたまそういう時期に私が理事長に就任したわけですが、したがって、私の第一の仕事は、会員の方々の批判に答えて、当学会を普通の学会にし、さらに「日本銃砲史学会」ここにありというように、その中味の充実と有意義な活動によって、存在感を高めてゆくことにあると思います。

普通の学会では論文審査（査読ともいう）は、必要条件です。人

間は不完全な動物ですから、誤字脱字は免れません。思い違いや明らかな間違いもあります。そこで査読が必要になります。査読によってはじめて学会は学会として認められ、その論文は業績として数えられるようになります。査読を経ない論文は随筆としてしか、世の中では認めてくれません。確かに査読には限界があり、あくまで著者の著作権は認めなくてはなりません。それでも査読は学会誌にとっては必要なのです。

当学会では査読の実施を4月の理事会で決定し、第345号の寄稿要領にその旨を示しています。

私は他の学会で今までに何回も査読を受けており、査読が精神的負担になり、腹の立つこともありました。ですから査読が大変だということをよく知っています。しかし学会誌である以上、止むを得ないことです。また国会図書館に納本している以上、あまり恥ずかしいものは、後世の為にも残したくありません。「銃砲史研究」をよりよくするために、どうか皆様の御協力をお願いいたします。

既に第345号から査読を実施していますが、寄稿された方々からは、審査を受けることは大変だったが、それが終わってみると、査読してもらってよかった、という声が聞こえてきます。

一方、査読の実施によって、論文が集まらなくなるのではないかと、懸念されます。そこで理事会で、理事は毎年最低で2編寄稿することを目標に努力することが、決定されました。自分で書いても、会員に書いてもらってもよいのですが、とにかく2編提出する努力を払ってもらうことになりました。しかし、理事から依頼を受けなくても、会員の皆様は『銃砲史研究』は自分たちで育ててゆこうという気持ちで、進んで論文を出してもらいたいものです。論文提出だけでなく、その他の面でもご協力をお願い致します。

この際、皆様の力で「日本銃砲史学会」を一層活性化させようではありませんか。私も微力ながら、そのお役に立たせていただきます。

最後に、宇田川先生と斎藤先生の論文を本誌に掲載させていただいたこと、及び第345号にも宇田川先生を囲んで行なった質疑応答を載せていただいたことには、『銃砲史研究』の質的向上に大いに寄与するものと、深く感謝しております。

(2004. 8. 4.)

シンポジウム プログラム

シンポジウム 「日本の砲術－和流砲術から西洋流砲術へ」

平成16年2月21日（土） 板橋区立ハイライフプラザいたばし

10:00 開会のあいさつ 板橋区教育長 佐藤 廣

<第1部> 日本における和流砲術の伝播とその流派

- 10:10~10:45 「田付流鉄砲の形態的特徴」
愛知県古銃研究会・日本銃砲史学会理事 安田 修
- 10:45~11:20 「中嶋流とその砲術型」
中嶋流砲術研究会・日本銃砲史学会理事 霜禮次郎
- 11:20~11:55 「鉄砲の材質と製作技法の自然科学的調査」
国立歴史民俗博物館助教授 斎藤 努
- 11:55~12:05 「森重流砲術型演武」
森重流砲術研究会・日本銃砲史学会 島津兼治

(12:05~12:55 -昼 食-)

- 13:00~14:00 特別講演「砲術史からみた鉄砲伝来」
国立歴史民俗博物館教授 宇田川武久

<第2部> 西洋流砲術とその終焉

- 14:00~14:35 「西洋流砲術とその終焉」
板橋区立郷土資料館・日本銃砲史学会 小西雅徳
- 14:35~15:10 「幕末の大砲について」
日本銃砲史学会理事 峯田元治

(15:10~15:30 -休 憩-)

- 15:30~16:20 パネルディスカッション
「日本砲術研究とその将来像」
パネリスト：宇田川 武久、安田 修、霜 禮次郎、
斎藤 努、島津 兼治、峯田 元治
司会・進行：小西 雅徳
- 16:25 閉会の言葉

主催 板橋区立郷土資料館・西洋流火術鉄砲隊保存会
共催 (社)日本ライフル射撃協会・日本銃砲史学会

シンポジウム「日本の砲術－和流砲術から西洋流砲術へ」の開催について

板橋区立郷土資料館が開催した特別展「日本の砲術－和流砲術から西洋流砲術へ」(会期 平成 16 年 2 月 7 日～3 月 21 日)に伴い、シンポジウムを企画した。郷土資料館としては、従来の博物館単独で行う講演会という狭い範囲での活動に留まらない方向性を模索した結果、日本銃砲史学会等を加えた形での多方面なジャンルの方々の参加を当初より念頭に置いて企画したのである。

少々内輪話的で大変恐縮ながら、共同企画でないとこの種の企画が成り立たないという情勢があった。実は板橋区立郷土資料館が過去に、西洋砲術家高島秋帆に因む展示を行った際(平成 6 年 2 月)、高島秋帆のシンポジウムを開催して故所壯吉氏の基調講演を頂いた経緯があり、将来的には銃砲史学会との共同が必要との認識が既にあったことも複線としてあったのである。今回はこのような経緯によって、板橋区立郷土資料館と西洋流火術鉄砲隊保存会が主催し、(社)日本ライフル射撃協会と日本銃砲史学会が共催という形でシンポジウムを開催したのである。

主催者の一つ西洋流火術鉄砲隊保存会は、高島秋帆の研究と砲術演武を再現実行する団体で、国内にある鉄砲隊の中では会が新しく実績性に欠けていた。しかし、今回のシンポジウムを企画することによって一種の学術性を加味することができ、鉄砲隊は会場設営と労力提供とに貢献して頂いた。一方の銃砲史学会とその会員からは、無償による貢献と発表の機会とを提供して頂き充実した内容とすることができたのである。基調講演 5 本、特別講演 1 本(国立歴史民俗博物館宇田川武久教授)、砲術型演武 2 本(内 1 本は基調講演と重複)及びパネルディスカッションと、これらは一日の内容としても規模が大きく従来の銃砲史研究に一石を投じることができたのではないかと思われた。このような内容構成と開催への確実性を挙げるためには、多様な団体及び個人のネットワークを構築しないと成り立たず、この点での銃砲史学会の貢献には計り知れない大きさがあったと思っている。

板橋区立郷土資料館としては、日本銃砲史学会に対して厚く感謝を申し上げますと共に、更にシンポジウムの記録が銃砲史研究に掲載・記録化されることに改めてその度量の大きさを見た思いである。貴会の今後益々の活躍を祈念したい。

平成 16 年夏吉日

板橋区立郷土資料館

特別展 「日本の砲術一同シンポジウム発表・補足報告

砲術史からみた鉄炮の伝来

国立歴史民俗博物館 宇田川 武久

本稿は、平成16年2月21日に板橋区立郷土資料館において、シンポジウム「日本の砲術 和銃砲術から西洋流砲術へ」が開催され、宇田川武久先生が上記のテーマで、講演された。共催として日本銃砲史学会も参加したことにより、この特別展の特集号を作成するにあたり『銃砲史研究』に報告したい。

【はじめに】

鉄炮伝来はキリスト教と共にヨーロッパ文化の到来と評価され、鉄炮伝来の議論は明治以来、こんにちに至るまで続いているが、いずれも「鉄炮記」に依拠しているために議論が種子島伝来に集中し過ぎている。現在、国内には膨大な砲術秘伝書と鉄炮の遺品が存在しているが、ここではそれらを駆使して鉄炮伝来の新説を提起したいとおもう。

【鉄炮伝来の諸説】

①長沼賢海氏の説—天文以前、日本には鉄炮が伝来していた。

長沼賢海氏は昭和元年十二月、広島県尾道市の渋谷新右衛門氏宅で銅製の鉄炮を、その後、各地で類似の実物資料を発見した。氏は天文十二年以前、日本には古い形成の鉄炮が伝わっていたと主張したが、その根拠は「朝鮮王朝と倭寇の関係から日本人が朝鮮王朝の開発した火砲を傍観していたはずはない。当時、日本と琉球は親密な関係にあり、またシナや江南や南蛮諸国、朝鮮や北シナと交通があり、天文以前、日本には中国か朝鮮の鉄炮が伝来する国際環境があった」と、当時の国際環境に求めた。

そして古い形式の鉄炮を三分類し、所蔵者と法量、銘文の有無を記し、形式、鉄炮の来歴、製造地を説明し、研究の端緒をなした渋谷家所蔵の鉄炮の由緒に言及した。

「鐵砲傳來」(『歴史地理』23-6、大正2年)「鐵砲の傳來(補遺)」(『歴史地理』24-2、大正3年)「鐵砲の傳來について」(『史淵』1、昭和2年)。

②有馬成甫氏の説—鉄砲の伝来は天文12年である。

長沼説への批判「實際支那には文献に依るも実物に依るも宗元時代より火砲があり、且其一種は文永十一年に蒙古軍が携行して博多の戦場では之を使用して居る。然し乍ら、それらの火器が、その後、天文十二年以前に我国に伝わったということは文献に之を見ることができない。若し伝来したとすればこの著しき事実に関して何等かの記録が皆無であるとは考えられないのである。

現在朝鮮と我国との交通は非常に便利であるとの概念を以て五百余年前の日韓交通の状態を盲断することは危険なことである。(中略)長沼博士の鉄砲伝来に関する所見は一の憶測に過ぎざるものと思せざるを得ない。」

(有馬説)鉄炮伝来は重要な文化的意義があり、日本人が伝来後、すぐに鉄炮を製造したことは驚嘆に値する。鉄炮伝来の史料は「種子島家譜」「鉄炮記」「ガルワノ著新旧発見年代記」「ピントの遍歴記」の四点がある。「種子島家譜」は正確な記録であるが、記事が簡単で伝来の事情は不明、南浦文之が種子島家譜や口碑、記録等の確実な史料によって編纂した「鉄炮記」が信頼にたる記録である。「鉄炮記」の記事から鉄炮伝来は天文十二年とみなすべきである(「鐵砲傳來說の検討」『史学』12-2、昭和8年)、『火砲の起源とその伝流』(吉川弘文館、昭和37年)。

③所莊吉氏の説—ポルトガル人の初来日は天文十一年、鉄炮の伝来は天文十二年である。

東南アジアの火縄銃と種子島銃や南蛮古渡、初伝銃の模型品も同一形式であり、種子島伝来の鉄炮は東南アジアのものともみた。鹿児島県の阿久根で発見された仏狼機砲の紋章は一四九五年から一五二一年にポルトガル王位にあったドン・マニエルI のもので、ガルバンの「新旧発見年代記」の記事と一致するとし、ポルトガル人の最初の渡来は一五四二年、鉄炮伝来は天文十二年とした（「種子島伝来銃についての考察」『鉄砲史研究』一 昭和四十三年、「天文以前における鉄炮伝来の実否について」同上 六六 昭和五十年、「鉄砲史における二、三の問題」同上 七七、昭和五十一年、『鉄砲伝来前後』有斐閣、「鉄砲伝来の真相」(『設楽原歴史資料館 研究紀要』 第3号 平成11年)。

④岡田章雄氏の説—天文十二年に種子島に鉄炮は伝来したが、ポルトガル人や倭寇によってほかの地域に渡来した可能性がある。

外国側史料は鉄炮伝来を天文十一年とするが、これは第一等の史料ではない。日本側の史料は六十年後の「鉄炮記」が唯一。種子島伝世の古文書や記録類、故老の回想や伝承を材料にまとめたと推測され、種子島については正しい史実を伝えているものの、ポルトガル人との交渉の点では想像や憶測、また誤解があり、さらに文飾表現もあって、かなり曖昧とした。伝来年次は「ポルトガル人の日本初来の月日、人物を断定することは不可能であるというに尽きる」とし、「若し強いて比較的妥当な結論を作るならば・・・一五四二年シャム（タイ）より三人のポルトガル人がジャンクで支那に向う途中種子島に漂流したという消息（アントニオ・ガルワン著『諸国発見記』のなかの記事）に比較的多くを信頼するのである」という岡本良知説を引用し、決定的な証拠史料がなければ解決できない。

「鉄炮記」の大船はポルトガル船で乗組員も中国人ではなく、ポルトガル商人の印象をうける。本書の執筆の時期はポルトガル船の来航がしきりであり、ポルトガル人が中国船で渡来することはなかった。当初はポルトガル人が中国のジャンク船で来航することは少なかったと、天文十五年に薩摩山川港に来泊したポルトガル船の船長ジョルジ・アンバレの記録で明白とした。

鉄炮伝来を示す史料は「鉄炮記」以外信用できるものはないと指摘しつつも、多くの中国船が来航し、ポルトガル人が乗り込んでいたから、種子島以外の鉄炮伝来のルートが考えられなくもなく、倭寇が伝えた可能性もあり、琉球船の南海貿易も頻繁であった時代、琉球にはわが国よりも早く鉄炮が伝えられていたかもしれない（「南蛮人とキリシタン」(『戦国の風雲、日本史の謎と発見8』 講談社、昭和54年)。

⑤洞富雄氏の説—天文以前、日本には中国か朝鮮の原始的な小銃が伝来していた。天文十二年の鉄炮は東南アジアではなく、ヨーロッパの瞬発式・頬付け式新鋭銃とみなした。

「鉄炮記」は二次的史料であるが、同家の原史料や島の伝承にもとづいて書かれたと思われる比較的的信憑性がある。天文十二年に種子島に鉄炮が伝来し、種子島時堯が二挺を譲り受け、臣下の笹川小四郎に命じて火薬の調合法を学ばせる一方、鍛冶数名に命じて銃筒を模造する仕事に当たさせた。尾栓をネジでふさぐ方式は知られていなかったが、翌年、来航した外国船に鉄匠がいたので、八板金兵衛清定がこれを学んで鉄炮の模造に成功した。

種子島では一年以内に数十挺の鉄炮を製造したと「鉄炮記」の記事を引用し、漂流したのは中国人五峯を船主とするフランシスコ・ゼイモトら三人のポルトガル人が便乗していたのであり、五峯は王直と推測した。

なお、洞氏は徳川美術館所蔵の「SAM THOME」とある二匁五分玉の鉄炮は日本製に似ているが、日本製ではないとし、西洋からの伝来の証拠と主張するが、誤解である。（『種子島銃一伝来とその影響』淡路島書房新社、平成三年）。『鉄炮伝来とその影響—種子島銃増補版』（校倉書房、昭和三十七年）、『鉄炮伝来とその影響』（思文閣出版、平成三年）。

【南蛮流秘伝書の存在】

流祖の藤井河内守は一二齊とも云い、鉄炮の達人である。事跡は不詳であるが、末流が諸州にいと「武芸小伝」は伝えている。

現在、藤井一二齊自署の原本は未発見であるが、直弟子の残した慶長・元和の秘伝書は、つぎの一覧のように南蛮流を呼称している（表一）。

秘伝書名（巻）	伝授者・被伝授者	年・月	備考	所蔵
鉄炮秘伝南蛮流書	宋 詳	慶長10・8	写本	歴博所蔵
炮銃之巻	荒木勘左衛門尉・秋田某力	慶長18	原本	所荘吉
南蛮流小鉄炮巻（二）	小泉木之介・佐谷助太夫	慶長17・8	原本	歴博所蔵
万槍之一集（三）	同上	同上	原本	同上
雨夜（五）	同上	同上	原本	同上
小筒之書第一	田中数馬佐・古山新七	慶長19・8	写本	同上
小筒切詰之書（上同）	同上	同上	写本	同上
南蛮流小筒之書第二	同上	同上	写本	同上
南蛮流小筒遠町之書第三	同上	同上	写本	同上
小鉄炮平鑑書	田中数馬佐・桑島新七	慶長19・9	写本	同上
小筒之薬（上同）	（田中数馬佐）・古山新七	慶長19・9	写本	同上
序・問書・印可・免状・ 絵図	石田左近入道玄斎敬吉・関平 兵衛尉	元和4・仲夏	原本	大坂城天守閣
題額無	藤原佐直	貞享4・10	写本	歴博所蔵

表一）現存する南蛮流秘伝書一覧

秘伝書では鉄炮の仕様を「筒定」とか「筒拵」と称している。表二は慶長十九年藤井一二齊が田中数馬佐に授けた「小筒之書第二」の「筒定之事」、「小筒遠町之書」の「いふう（異風）物はり様之事」、それに貞享本の「鉄炮定之事」の仕様を一覧にしたものである。

南蛮流の鉄炮は先口の柑子がまるく膨らんだ玉縁であり、機関部は外部にパネのない内カラクリ、先口の形状は玉縁と一致している。玉目は流派によって差異があるも

の、二十匁以下を小筒とする場合があるから、秘伝書の鉄炮は小鉄炮、あるいは小筒である。ちなみに南蛮流の秘伝書名は小筒、あるいは小鉄炮を冠している。

玉目 部位	小筒 (3匁2分から 5分玉)	意府物 (15匁)	貞享本 (3匁5分から6分 玉)
筒長	1尺2寸から1尺5寸	2尺5寸	3尺1寸から5寸
台尻長	6・7・8寸	9寸	7寸5分・8寸
本口の太さ	1寸2分	厚さ1寸8分	1寸、2寸1分、2分迄
前口	1分5厘		1分半劣り
前目当と巻金の間	8寸	4寸5分	3寸
前目当 (高・長)	3分・6分	5分3厘	3分・6分
先目当 (高・長)	3分半	5分3厘	3分・6分
先口	柑子、玉縁	玉縁	柑子玉縁
玉縁周り (筒口迄)	2寸6六分・1寸2分	2寸	1寸1分
栓差	3ツ	4ツ	
捻子抜	1寸1分半	1寸8分	1寸1分半
地板	4寸	5寸	4寸・5寸
腕貫 (筒先の栓差)	2寸前		
からくり (機関部)	うちからくり		

表二) 南蛮流秘伝書が伝える小筒と意府物の仕様明細

【南蛮鉄炮の存在】

わが国に渡来した鉄炮は南蛮筒とか、南蛮鉄炮とよばれていた。南蛮筒の早期の史料は、天文二十三年正月十九日に大館晴光が將軍足利義藤(義輝)の命を奉じて豊後の大友義鎮に出した副状の「南蛮鉄炮御進上」の文言である。(田北学編『編年大友史料』昭和十三年、金洋堂)。

前年の五月二十六日、將軍足利義輝は上野国の有力豪族の横瀬雅楽助成繁に鉄炮一挺を贈ったが、この鉄炮は南方の鍛冶が壺山城において製作したもので、大友氏が贈ってきた南蛮筒を見本にしたにちがいない。注文をうけた鍛冶は砲術師の指図で和製南蛮筒を製作した。この当時、山城に砲術師がいた直接的な証拠はないものの、將軍足利義輝が砲術に熱中しているから砲術師の存在は否定できまい。山城を生国とする砲術師は南蛮流の流祖藤井一齊をおいてはほかにない。すると豊後大友氏が贈ってきた鉄炮は南蛮流の小筒に近いと推測され、南蛮流の由来も判然とする。つぎの史料は天正十四年四月、徳川家康が北条氏政に「てつはうなんはん筒」を贈った「家忠日記」の記事、つぎは慶長十八年十二月二十八日付、九州豊後の佐伯藩の「てつはう出来帳並払帳」にある「内膳よりなんはん筒」の記事である。(佐伯藩史料 佐伯市立図書館蔵 佐伯史教育委員会保管)。

また徳川家康の遺産「駿府御分物御道具帳」には南蛮筒十八挺が記載され、さらに弘化二年、江戸幕府が遠国役所に武器類の在庫調査を命じた時、大坂城には三匁から七匁までの南蛮筒十六挺が在庫していた。これもまた南蛮筒の存在を示す有力

な証拠である。

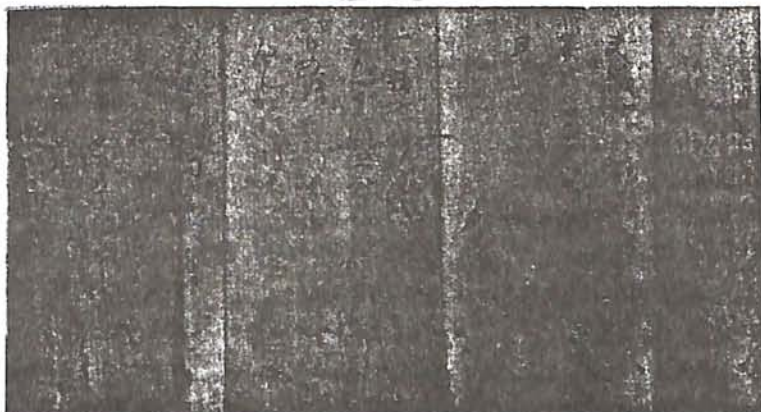
明細	玉目	筒長	全長	口径・銃口	栓差	カブクリ	所蔵
①伝初伝銃		69、2		1、7・五線			西表市博物館
②伝国産第一号				・筋立芥子	3	外	西表市博物館
③南蛮筒		91	123	1、8・筋立芥子		外	増国神社
④南蛮筒		72	101、 1	1、2・五線	3	外	増国神社
⑤異風筒	6	164、9	200、 3	1、6・角柑子	4	外	徳川美術館
⑥異風筒	6	126、1	159、 4	1、7・五線	2	内	徳川美術館
⑦南蛮筒			100、 5	1、9・五線	3	内	鹿児島個人蔵
⑧南蛮流筒	2、 5	151、2	190、 8	1、1・角柑子	4	内	徳川美術館

表三) 現存する南蛮筒・異風筒一覧

- ①の伝初伝銃は種子島家から博物館に寄託されたもの、台尻は後補、銃身だけが南蛮古渡である。
- ②の伝国産第一号は江戸時代の安永年間のもので、初伝銃を見本に作られた異風物である。
- ③の南蛮筒は筒長と台尻が不釣り合いであるので別物である。火蓋は一枚、銃身全面に真鍮象嵌を施す、真鍮製の火縄挟と弾金は後補である。(図版1参照)。
- ④の南蛮筒は③に較べて小さく、本口が鳶尾になっている。金具は鉄製、火縄挟と前・先目当は後補である。
- ⑤の異風筒は角筒、弾金は一枚、地板、胴金、火縄挟のそれぞれに唐草の毛彫りが施してある。一枚火蓋であったものが、割火蓋に改造され、火蓋の上面に三つ葉葵の彫物があり、筒上角に人物と唐草紋の象嵌がある。
- ⑥の異風筒は上面が三角、下は丸筒である。火縄挟は鉄で銀象嵌、地板、雨覆は魚子に唐草の毛彫。台尻に慶長期の「御台屋小田新助」の墨書がある(⑤と⑥図版2、3参照)。
- ⑦は④と同様、鳶の尾形式である。台尻の形状からシャムとする説があるが、常陸土浦城に付属する鉄炮目録のなかに「琉球筒鳶尾」と書いたものがある。この鉄炮は薩摩島津氏が開ケ原で使用したという。鹿児島県内に伝来しているのだから島津氏との関係は無視できない。島津氏は琉球とも深い関係にあったから琉球筒の可能性は捨てきれない。ここで南蛮流秘伝書と関連して注目すべき史実を指摘したい。
- ⑧の徳川美術館所蔵の銃身の長い二匁五分の鉄炮である。仕様は一覧の通りだが、火蓋、地板、火縄挟、雨覆、用心金、引金の金具に唐草毛彫があり、筒の上角にも人物禽獣の

唐草銀象嵌が施されている。この鉄炮は金具の細工や部品の形状から日本製とみなせるが、上角に間隔を置いて「SAMTHOME」と、やや稚拙なローマ字の線影りがある（図版4参照）。

さきの南蛮流秘伝書一覧の一六一七（慶長十七）年八月十八日の小泉木之介が佐谷助十夫に伝授した「雨夜」につぎの秘伝がある（図版5参照）。



図版5、「南蛮流秘伝書（雨夜）安齊実旧蔵 現国立歴史民俗博物館所蔵

一極町ノ薬

おらんと	玉対	七	八	
ものろ	同前	八	七	
べんがる	同前	玉玉一	玉二	玉
さんとめひ	同前	対	七	
ぼるとがる	同前	九	七	已上

一、薬込

一町 半分 二町 大切、此上者一町ニ付薬四分増也。

三匁玉ニ合薬てれハすとう候。

炮術の修行には近距離と遠距離の射撃があった。前者を小目当、後者を町打といい、さらに町打は十町以下を近町、それ以上を遠町に区分した。ここでの町は十町以下だから近町である。極町ノ薬とは町打に用いる火薬のことであり、その町薬の名前を外国の国名や地名で表している。三匁玉に合薬とあれば、小筒、小鉄炮の町打になり、秘伝のなかでも難しい秘伝とされた。また一町に付薬四分増とあれば、この数字は硝磺、硫黄、炭の配合比率の可能性がある。おらんと（オランダ）以下は、いずれも極意の町打の玉薬の名称である。したがって徳川美術館所蔵の南蛮筒の筒の上角に彫られた「SAMTHOME」は玉薬の名称を表しているのである。

なお、鉄炮の歴史用語に玉火矢があるが、この用語は九州地方、それも豊後の大友氏、薩摩の島津氏の史料に多い。現在、九州地方には薩摩筒と俗称される特有の鉄炮がある。薩摩筒の仕様は銃身長と台尻を合わせて六十八センチ八ミリ、約二尺

二寸、玉目が十八ミリ、三匁玉と小さい。カラクリは弾金が外部にない内カラクリ、引金が蝶番になり、先口も玉縁になっている。薩摩筒と種子島住定堅の異風筒を比較すると、台尻、先口、カラクリ、引金など仕様が異なるので、渡来は別系統と考えなければなるまい（図版6参照）。

【鉄炮伝来の新説】

日夏繁高の『武芸小伝』は泊兵部少輔藤原一火の略伝を載せている。一火の活動は天正期とみてもよいが、一火流の秘伝書に「南蛮筒ノ事」として注目すべき記事を載せている。

南蛮筒は腰の前にいおり（庵＝右手で握る部分）がない。大形は竹の根なしにせず（錫力）と色々の象嵌を入れ、或いは筋柑子、ウケ角にせず（錫）と丸柑子、赤角柑子、けし（芥子）柑子にする。今は日本にて古の南蛮筒に似せてするなり。

古の南蛮筒は色々象嵌があり、銃口の形も筋柑子、角柑子、芥子柑子と様々であった。今の日本では古の南蛮筒に似せて拵えているという。さきに現存する南蛮筒あるいは異風筒の仕様一覧を示したが、その仕様は区々である。

十六世紀半ばから十七世紀初頭にかけて銃身や台尻の形、外・内からくりの別、銃身の長短など様々な仕様の南蛮筒が外国勢力と接触のある西国地方の勢力者の領国にもたらされた。砲術師のなかには伝えられた南蛮筒の運用を専門にした流派、すなわち、南蛮流があった。やがて砲術師は南蛮筒の仕様を真似た異風筒を工夫して、数多くの異風筒を製作して実用に供した。

鉄炮伝来の研究史を整理すると、やはり「鉄炮記」に依拠している論者が断然多く、なかには鉄炮は種子島を起点にして全国に普及したと説明するものも少なくないが、現存する砲術秘伝書や鉄炮の遺品の検討によって、種子島への伝来は多くあった渡来の一事例とみなすべきである。



図版1、南蛮筒 靖国神社所蔵



図版2、異風筒 徳川美術館所蔵



図版3、異風筒 徳川美術館所蔵



図版4、南蛮流の鉄砲 徳川美術館所蔵



図版6、薩摩筒 国立歴史民俗博物館所蔵

【参考史料および文献】

- 有馬成甫『火砲の起原とその伝流』（1962年、吉川弘文館）
所莊吉「鉄砲伝來說の検討」一、二（『銃砲史研究』一九〇、一九五、1987年）
洞富雄『鉄砲』（1991年、思文閣）
村井章介『海から見た戦国日本』（1991年、筑摩書房）
佐々木稔編『火縄銃の伝来と技術』（2003年、吉川弘文館）
宇田川武久『東アジア兵器交流史の研究』（1993年、吉川弘文館）
近藤瓶城編「武芸小傳」『改定史籍集覧』第十一冊（1984年復刻、臨川書店）
田北学編『編年大友史料』（1938年、金洋堂）
「由良文書」『群馬県史』資料編七（1985年）
宇田川武久『鉄砲と戦国合戦』（2002年、吉川弘文館）
史料大成「家忠日記」（群書類従完成会）
「佐伯藩史料」佐伯市立図書館蔵 佐伯史教育委員会保管）
『大名の備え—甲冑と武器— 徳川美術館蔵品抄10』（1996年、徳川美術館）
「遠国武器類」五、六（内閣文庫所蔵）
所莊吉「種子島伝来銃についての考察」（『銃砲史研究』一、銃砲史学会、1968年）
同『火縄銃』改訂版1969年、雄山閣
所莊吉『図解古銃事典』1987年、雄山閣
『寛政重修諸家譜』（群書類従完成会）
「一火流秘伝書」（歴博所蔵）

（国立歴史民俗博物館）

大垣藩の田付流鉄砲流派について

安田 修

峯田元治

小笠原信夫

はじめに

鉄砲伝来、慶長年中（1596～1615）までに確立された砲術流派は少なく、30位の流派である。しかも、その時代に製作されて現存している鉄砲はわずかしか見ることが出来ない。

主な流派で現存している鉄砲は、稲富一夢が祖である稲富流、田付兵庫助景澄の田付流、井上九十郎外記源正継による井上流、田布施源助忠宗の田布施流等があるだけで、この分野の更なる研究深化が望まれる。

江戸時代初期、つまり慶長・元和の段階での少ない鉄砲流派は、故所 莊吉氏によれば江戸時代を通じて400以上に増え、和流砲術の盛況が理解できる。「砲術諸流の調査」

今回、紹介する田付流は幕府方の系統について書かれているものの、傍流の大垣藩の田付流の系統に関しては不完全であった。

慶長以前の砲術伝書は宇田川武久氏が愛知県古銃研究会の講演での『鉄砲の伝来の実相』によると、

永禄3年7月（1560）、足利義輝が長尾景虎に与えた「鉄放薬方並調合次第」（上杉家文書）

永禄12年3月（1569）、（某）長氏が自遊（由）齊の「薬方書」の断簡

天正13年6月（1585）、宮崎内蔵人佐がみやざきくらんのすけ南左京亮みなみさきょうのすけに授けた流派未詳の「玉こしらえの事」 歴博

文禄3年2月（1594）吉田善兵衛盛定が屋嶋藤三郎に授けた岸和田流の「鉄砲の大事」 守田神社

以上の4点を挙げている。

慶長期に砲術流派が成立した者は、37～39ほどあげられている中で、田付流砲術も含まれている。

幸い、大垣藩の田付流の子孫が東京に在住していることが判明し、史料等を保管・継承されていることが判明した。ここに、大垣藩の田付流の系統を紹介しつつ、合わせて田付流の鉄砲の形態についても報告したい。

所氏は、この調査につづき「流派別砲術家人名録」および「砲術家別索引」・「砲術諸流派系図」・「和流砲術事典」・「砲術用語辞典」をまとめる予定でおられた。今後残された者が研究を続ける必要があると考えるからである。

また、鎧、刀等所蔵されておられることで、刀の鑑定に元東京国立博物館の小笠原信夫先生にご助力を得ました。

この原稿は、2月に板橋区立郷土資料館の主催・日本銃砲史学会共催で「日本の砲術一和銃砲術から西洋流砲術一」でのシンポジウムで報告したものであるが、紙数の制限があり短縮されたので再度報告する。

1、田付流砲術の系譜

田付の系譜として幕府に仕えた田付氏を筆頭に、大垣藩、尾張藩の各藩鉄砲方を勤め

ている。

A、幕府方田付流（寛政重修諸家譜）による

1、田付美作守景広 かみづひろ 生國は近江國神崎郡田付村居住仕候。

↓

1、田付美作守景定 かみづさだ 永禄11年(1568)9月織田右府(信長)のために田付において
↓ 死す。

1、田付兵庫助景澄 かみづすみ 父景定死去の後、田付を去って摂津國三田に移り住み、また美濃國に閑居する。

↓ 初代

慶長18年(1613)にかけて砲術にすぐれていることを聞いた東照宮(徳川家康)は、召し抱え下総國香取郡に采地500石を贈る。

後代々砲術の師範代を勤め、田付流と称した。元和5年(1619)10月死去。

多くの伝書をあらわしており、「鉄炮打方、十三段初心集、鉄炮伝来記 中筒打方、求中集、求中集別巻、十二影の書、鳴鐘問答、直し方の書、早打之書、出会打方算法、大筒町積、銃目録、家之文字、三方一圓、銃算書目当之秘事」が見られる。

1、田付四郎兵衛景治 かみづじ 元和5年12月遺跡を賜り、鉄炮の師範を継承した。寛永2
↓ 2代 年(1625)10月采地の御朱印をくだされ、3年台徳院(秀忠)殿上洛のとき従う。元和14年(1639)3月死去。

1、田付四郎兵衛景利 景治の養子 寛永11年(1634)家光に拝謁する。

↓ 3代 14年12月遺跡を継ぎ、鉄炮方を勤めた。天和2年(1682)300石の加恩があり800石を知行す。
貞享二年(1685)7月死去。

1、田付四郎兵衛直平 承応三年(1654)7月家綱に拝謁する。貞享2年

↓ 4代 (1685)7月遺跡を継ぎ、鉄炮方となる。寶永3年(1706)11月に死去。

1、田付四郎兵衛直久 岡部土佐守正綱の9男、延宝7年(1679)10月家綱に拝謁する。

↓ 5代 寶永3年(1706)12月に遺跡を継ぎ鉄炮方となる。

1、田付四郎兵衛直政 正徳2年(1712)7月家宣に拝謁。元文3年(1738)10月鉄炮方となる。寶暦7年(1757)5月死去。

1、田付四郎兵衛直素 なおもと 寛延元年(1748)11月家重に拝謁する。寶暦7年
↓ 7代 8月遺跡を継ぎ、鉄炮方となる。天明8年(1788)5月死去。

1、田付四郎兵衛直温 なおかつ 安永3年(1774)12月家治に拝謁。天明8年(1788)8月遺跡を継ぐ、鉄炮方となる。

1、田付直寛 なおたか 寛政8年(1796)11月家斉に拝謁。

9代

B、大垣藩の田付流 現在東京に子孫が在住、以下は『田付家譜』による。

1、田付左太夫正景 田付兵庫助景澄の3男、大垣藩の戸田氏鉄に仕える。

↓ 初代 生國近江國神崎郡田付

慶長10年(1605)覚岸院様(戸田氏鉄)公儀江被 仰上於
江州志賀郡膳所ケ崎で初て召し呼ばせられ御合力米を下し
置かれる。干時10才。

元和3年(1617)播州河邊郡尼ケ崎江御所替之節御供仕候。

元和4年(1618)御知行永代200石被 下置候。

元和7年(1621)倅兵助家芸相統候。

年号伝承不仕候鉄炮之術師範被 仰付候。

寛永12年美濃國安八郡大垣江御所替之節御供仕候。

寛永12年(1635)御持筒頭被 仰付之候。

慶安元年(1648)隠居仕候、44年相勤申候、干時53才。

寛文9年(1669)美濃國安八郡大垣で病死、74才。

1、田付左太夫正澄 生國摂津國河邊郡尼ケ崎

↓ 2代 寛永7年(1630)5月初而鉄炮打被 遊。(9才ノ頃)

寛永12年(1635) 覚岸院様御代美濃國安八郡住居ニ而
御小姓御近習ニ被 召出候。

寛永14年(1637)肥前國島原御出陣之節御供仕候。

寛永14年新築山より石火矢打候、 覚岸院様より兵助打候様
仰出候。

慶安元年(1648)父跡目御知行2百石家屋敷下置、父支配
之御持筒組被 下置。

承応2年(1653)小屋場五ヶ所被 仰付年々筒薬合相納。

寛文7年(1667)知行100百石加増300石被 下置候。

寛文12年(1672)戸田九郎右衛門支配之御先鉄炮組被
成預之旨被 仰付之候。

延宝3年(1675)鉄炮御師範被 仰付候。

天和3年(1683)9月病死。49年相勤申候、64才。

1、田付左太夫正十^{まさとつ} 生國美濃國安八郡大垣

↓ 3代 寛文12年(1672)高称院様御代小姓組被 召出20俵
2人扶持。

天和3年(1683)高称院様御代(戸田氏西)父跡目御知行
250石被 下置。

同年高称院(戸田氏西)之時元禄年に居宅類焼仕候。

同6年御知行目錄頂戴仕候。

貞享元年(1684)御意鉄炮執行弟子有之並自分致稽古候内
夏中御番御免被 成下候。

貞享元年(1684)御馬廻御番所被 仰付之候。

元禄7年(1694)高橋屋敷御鉄炮打場被 仰付出来ニ付請
取申候。

元禄15年(1702)辻 又藏支配之御先鉄炮組被 仰付候。

享保5年(1720) 49年相勤、66才。

享保6年美濃國安八郡大垣病死仕候。

1、田付左太夫^{まさちか}正周

↓ 4代

生國美濃國安八郡大垣

享保2年(1717) 靈台院御代様(氏定) 大小姓組被 召出20俵2人扶持被 下置御詰御番所仰渡。

享保5年(1720) 2月 靈台院様より父跡目250石家屋敷被 下置。鉄炮指南相勤候。

享保5年稽古筒薬合候様被 仰付調合仕差上申候、御馬廻御番所被 仰付鉄炮指南如前々可相勤。

享保5年家督之御禮申上候。

享保5年鉄炮致指南候ニ付御番被 遊御罷免之旨被 仰出候。

享保5年御本丸御鉄炮諸色其外御軍用之御道具等御鉄炮奉行被 遊相談諸事引請様被 仰付候。

享保19年(1734) 奥村治郎右衛門支配之御先鉄炮組被 仰付候。

寶曆8年(1758) 7月病死。42年相勤、71才。

1、田付左太夫景定

↓ 5代

生國美濃國安八郡大垣

寶曆3年(1753) 崇貞院様御代於美濃國安八郡大垣部屋住ニ而大小姓組被 召出御切米20俵御扶持2人被 下置御詰御番所被 仰付候。

寶曆8年(1758) 父跡目250石家屋敷被 下置。

同年鉄炮師役被 仰付。

寶曆9年(1759) 家督之儀之御禮申上候。

同年 家芸之儀未熟ニ御座候節者身退候様段先祖申伝置候間奉恐、御家退去候仕候然処帰参仕候様一家供江被 仰付候帰参仕候。

但其砌田付左太夫儀近年病身ニ罷成家芸相続難相成候ニ付令退去候家芸難行届候者立去候処、従先祖申伝候趣茂有之由無據訊ニ者候得共尚又、御間茂可有之処心得違之事ニ候。

乍然先祖家芸格前々家柄ニ付召帰候。未不及壯年ニ茂 養生馬廻可相勤候。此有一家共より早速可申聞旨、御下知書を以戸田権太夫より被 仰渡候。

寶曆11年(1761) 辻与惣左衛門支配之御先鉄炮組被 仰付候。

同年家芸出精仕候様被 仰出之金30兩被 下置候。

明和2年(1765) 門弟鉄炮稽古出精仕其上町打等入用金20兩頂戴仕候。

御家中稽古打被 遊御免候、然処於私射場者9月中被 成下

御免候。

安永3年(1774)鉄炮御師範被 仰付之候。

安永4年御旗奉行役並只今迄小野勝五右衛門支配之同心組被 成御預之旨被 仰付之候。

安永9年(1780)蟄居被 仰付候、尤28年相勤申候、干時53才。

天明元年(1781)御家退去仕候。

但其砌倅兵助御由緒之者江父左太夫行跡不埒之趣相聞、去春蟄居申付之格別之家筋ニ茂付召出扶助申付之處令退去不届之至ニ候。左太夫儀蟄居之身分ニ候得者別而万端相慎可罷在処不埒之書付差置倅共召連令退去候段言語道断不届至極候。

召連屹曲事可申付候条有所相知次第可申出旨、御下知書ヲ以中嶋十郎右衛門ヨリ被 仰渡候。

天明8年(1788)帰参被 仰付相慎罷在候様被 仰付候寛政元年7月格段之思召を以慎之儀御差許弥門弟取立可申旨被 仰出候。

寛政7年(1795)病死。

1、田付左太夫正友

↓ 6代

生國美濃國安八郡大垣

安永2年(1773)於中之宮河原薬師堂之御筒ニ而町打仕候節遊、御覽於右御場所初而、御目見仕御羽織拜領仕候。干時8才。

安永3年年始無足並御目見得仕候。

安永9年(1780)正月 父跡目250石5人扶持被 下置御番所仰付候。

寛政元年(1789)2月鉄炮師役被 仰付候依之1ケ年詰之江戸並御夜廻等被 成下御免候。

寛政4年(1792)正月先知之通250石被 下置候。

享和元年(1801)5月上野八弥支配之御先鉄炮組被 成御預之旨被 仰付之候。

文化4年(1807)8月鉄炮御師範被 仰付候。

文化14年(1817)10月妾腹之倅兵助嫡子致度旨奉~~願~~通被 仰付候。

文政3年(1820)病死。41年相勤申候、干時55才。

1、田付左太夫景昌

↓ 7代

生國美濃國安八郡大垣

文政3年(1820)泰嶽院(戸田氏庸)御代父跡目25人扶持被 下置大小姓御番所被 仰付候。

文政12年(1829)先知之通250石下置被 候。

天保7年(1836)御馬廻御番所被 仰付鉄炮師範被 仰付候、依之壹ケ年詰之江戸並御番夜廻リ等披 成下御赦免之旨被 仰付之候。

天保8年(1837)正木喜左衛門支配御先鉄炮組御預之旨被 仰付之候。

天保12年(1841)鉄炮御師範為仕申候被 仰付之候。

安政2年(1855)病死。36年相勤申候、干時44才。生國美濃國大垣、生年天保9年

1、田付兵助景賢
↓ 8代

弘化5年(1848)年始無足並御目見仕候。

弘化5年於御下屋敷、初而鉄炮打前被 遊御覽候節、京織縞袴反頂戴仕候。

安政2年(1855)父跡目御知行250石家屋敷共被 下置。

安政4年(1857)小野麻之助支配之御先鉄炮組被 成御預之旨被 仰付候。

安政4年願之趣御先鉄炮組支配御差許席之儀者御先鉄炮頭次座被 仰付候。

安政5年鉄炮師役仰付。依之壱ヶ年詰之江戸並御番等被 成下御赦免之旨被 仰付候。

万延元年(1860)黒川与一兵衛支配之御先鉄炮組被 成御預候旨被 仰付之候。

文久3年(1863)於江戸表御旗奉行役被 仰付只今小野麻之助之同心被 成御預之候旨仰付之候。

文久7年大頭院様被 遊御上京候右御上京中御旗奉行被 仰付候。

元治元年11月伏街戦功ニ依り御知行50石御加増。

同年11月水戸浪士武田耕雲齊京都へ押登候ニ付為防禦神戸駅へ出張シ小原兵部殿申談大砲配布可致旨被 仰付之候事。

慶応2年(1866)操練所へ出勤教授可相勤之旨被 申付候事。

慶応3年(1867)大砲1番隊長被 申付候事。

同年軍務学校砲術師役兼被 申付候事。

明治元年(1868)戊辰ノ役2月大垣藩ニ於テ軍事奉行補佐ヲ以テ東山道御先鋒トシテ西京ヲ発シ、武州板橋ニ至リ暫ク滞留夫与リ野州岩井宿之賊徒撃退続テ宇都宮城ヲ拔キ奥州白川ニ於テ数度防戦総テ勝利、暫ク会津城での激戦において重傷。

明治6年(1873)出先ニテ軍事奉行役被 申付候事。

同年軍務官副總裁職被 申付候事。

同年被 叙従6位。

C、尾張藩の田付流

1、古高忠右衛門正永 江州古高村に住す。 慶長の頃

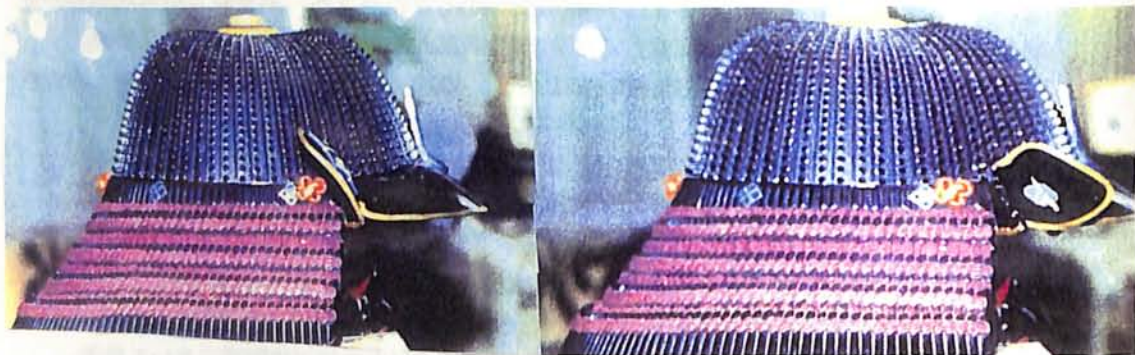
↓ 1代目

1、古高平右衛門祐正

- ↓ 2代目
- 1、古高善右衛門正信 寛永3年(1626)被召し出され、 200石
- ↓ 3代目
- 1、古高善右衛門正武 初善三郎致仕号一帆 父家領継ぐ、元禄15年致仕
毎年大垣へ修行
- ↓ 4代目
- 1、古高善右衛門正逞 初弥十郎 号平山
- ↓ 5代目
- 1、古高善右衛門正芳 初半平 号菰江
- ↓ 6代目
- 1、古高善右衛門正尹 初直吉または弥十郎 300石
- ↓ 7代目
- 1、古高弥十郎正員 初鎌三郎 文化8年(1811)家督
- ↓ 8代目
- 1、御友三右衛門重猗 天明2年(1782)
- ↓ 9代目
- 1、御友三左衛門重民 150石
- ↓ 10代目

2、大垣藩田付家に所蔵されている史料

- イ、大垣藩田付流六代目師範正友が着用した紫糸威二枚胴具足 1領
兜) 六十二間小星筋兜 しころ 綴 六段紫糸威 右吹返蝶番付
前立金地釘抜形 高一六・五センチ 1領

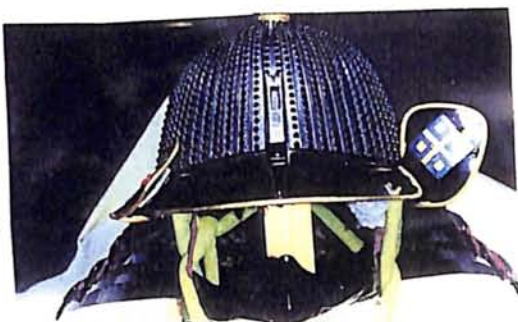


正友が使用した兜
吹返しが立っている状態

吹返しがたたまれている状態



正面より見て立っている状態
吹返しが動く兜はあまり数がみられない。特に片方だけ動くものは珍しい。



正面より見てたたんでいる状態



越後國明^{みょうちん} 珍吉久 吹返しが立っている状態（浜沢家） 吹返しがたたまれている状態



田付家の蝶番の状態



浜沢家明珍吉久の蝶番の状態

山上八郎著『兜の研究』^{註3}によると、吹返しの名は鎌倉時代に見られ、左右を分けて備えている時は、右の吹返し・左の吹返しと称した。

吹返しの効用は時代によって同一ではない。最初の頃の目的は、矢、および刀の攻撃から防御するためであったが、その目的も薄れ装飾的な物も出来てきた。

田付家に所蔵されている兜は、吹返しが蝶番によって動くことから鉄炮の射撃に関係があるかと思われたが、実際に長距離で使用する矢倉を使用して見たが、吹返しの移動は関係ないことがわかり鉄炮の射撃には関与していないように思われる。

また、これに関しての史料は見つけることは出来なかった。

(面頬) 鉄錆地四段下げ紫糸威^{おどし} 白髭付 1面
(胴) 板札盛上げ紫糸威二枚胴 屏風板付^{しょうよう} 杏葉 付四ツ目菱紋蒔絵

胸板押板に四ツ目菱紋三つ付 威小びれ付 胴裏白檀地
背に「田付正友（花押）」の銀泥書あり 胸丈三六・〇センチ 1領



6代目師範田付左太夫正友（花押）

背に「田付正友 花押」の銀泥書

- (草摺) 前三間と後四間の五段下りの別仕立 紫糸威 ゆるぎの糸革綴 一腰
- (佩楯) 四段黒漆革札 青地錦 菊獅子・菖蒲革付 一腰
- (籠手) 篠籠手、こはぜ水牛 六二・五センチ 一双
- 別に 射形篠籠手 四ツ目菱紋蒔絵付、こはぜ象牙六六・六センチ 一双
- (臙当) 一双 紺麻地足袋 一双
- (袖) 紫糸威当世袖 一双
- (鎧櫃添)
- (別) 十八間金箔押筋兜 板綴 四段 檜鳥糸威 前立角もと 脇立角もと付 二合
- 高十八・〇センチ 一頭
- 腕貫 二口 青貝散口葉入 白革玉入セット 一組
- 鼻紙袋 一口

口、刀等

- (1) 刀 銘 是介 刃長六六・四センチ
鑄造 磨上 目釘孔二ツ
- (2) 太刀 銘 則宗 刃長八二・五センチ
鑄造 腰樋アリ 生ぶ 目釘孔三中一埋 再刃
- (3) 薙刀 銘 常陸守宗重 刃長四〇・二センチ
鑄刀造 薙刀樋アリ 生ぶ 目釘孔一ツ 正真

- (4) 脇差 銘 大和大掾藤原正則 刃長四七・四センチ
平造 刃樋アリ 目釘孔二ツ
- (5) 脇差 銘 長光 刃長五三・七センチ
平造 生ぶ 目釘孔二ツ
- (6) 刀 銘 藤原久幸造 刃長七〇・四センチ 正真
文化九年二月日 鑄造 生ぶ 目釘孔一ツ
- (7) 薙刀 銘 志津三郎兼氏 刃長二六・〇センチ
薙刀造 生ぶ 目釘孔二ツ
- (8) 短刀 銘 若狭守氏房 刃長二九・九センチ
平造 生ぶ 目釘孔二ツ 生真
- (9) 短刀 銘 宇多國弘 刃長二九・一センチ
平造 生ぶ 目釘孔一ツ 正真

ハ、火縄銃

六代目師範正友が使用した火縄銃が所有されている。
田付流の特徴を備えた銃であるが、製作者は無銘である。
全長 1、411mm 銃身長 1、092mm 口径 13、3mm
3匁5分玉

火挟、地板、雨覆等金具の材料は真鍮である。特に火蓋は田付流の形態である袋(箱)である。

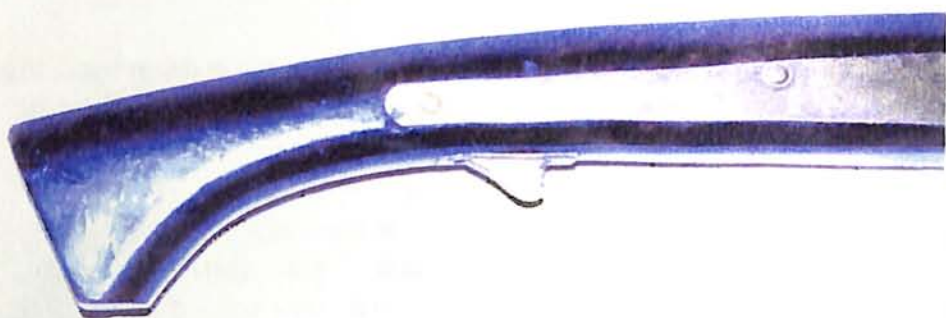
台木の材質は樫で、台尻、筒先の形態は小口径に見られる特徴を備えている。機関部は平カラクリである。



全長の写真



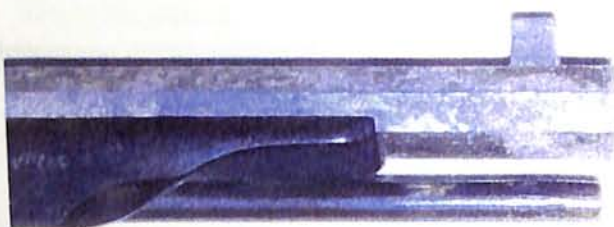
銃身上面に「さしも草」と銀象嵌がされている
「さしも草」の意味は不明である。ご教示ください。



田付流の特徴である台尻の形態

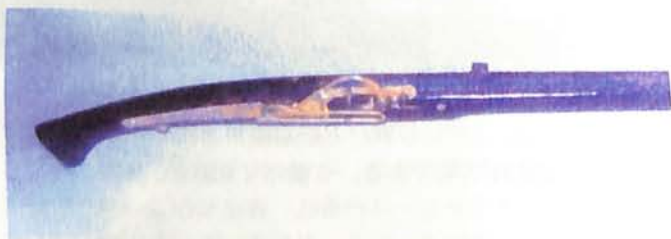


慶長17年に伝授された田付流伝書に見られる鉄炮の形態（東京国立博物館）



台尻の形態

筒先の形態





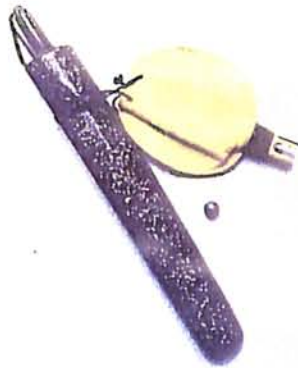
袋火蓋（箱）の形態



機関部のカラクリ



早合（家紋入）



玉入



組下合印



田付兵助組

3、田付流の鉄炮形態の特徴

慶長期に製作された田付流の鉄炮は、製作者、製作年月日が確認できるものが少ない。

1、大坂城に展示されている『トコナツ』と呼ばれる田付流鉄炮

全長 186、5センチ 銃身長 142、5センチ 口径 2、0センチ

筒上面ニ田付兵庫助宗鉄入道の刻印がある (大坂城所蔵)



台尻は直線的にきれ、銃尾がくびれている。火蓋は袋型(箱型)で火皿を覆っている。

4、田付流鉄炮の雛形

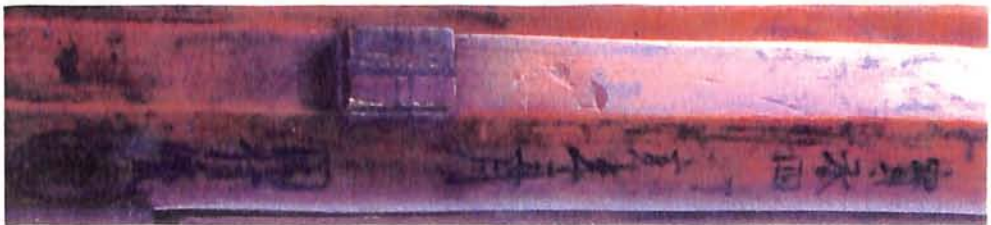
1、寶永4年(1707)幕府の鉄炮方田付四郎兵衛直友の意向により、田付流二十目、三十目の鉄炮の製作をするため、国友鉄炮鍛冶年寄国友兵四郎、同助太夫、同徳左衛門、同善兵衛宛に木型の雛形を渡し、これと同じ形態に製作するようにと命令している。



田付流二十目、三十目の鉄炮木型雛形 (側面) (名古屋城所蔵)



田付流鉄炮の特徴である台尻、筒先部の木部の形態



寶永四年 丁亥 田付四郎兵衛 花押



国友鉄炮張年寄、国友兵四郎殿、同助大夫殿、同徳左衛門殿、同善兵衛殿



この雛形に忠実に製作した鉄炮 (旧林利一氏所蔵)

- 2、尾張藩の田付流の鉄炮では、『田付流御鉄炮^{註2}目録』によると、文化11年(1814)より嘉永6年(1853)までの39年間年2挺づつ42挺の鉄炮(千字文)を国友勝左衛門とその子鉄三郎が尾張藩の田付流の鉄炮として製作している。それで尾張には田付流のよい手本なる銃がなく、国友藤兵衛氏正に前述の雛形を送って注文した。



30匁玉 国友藤兵衛氏正作 「天」



20匁玉 国友藤兵衛氏正作 「地」

国友氏正の「天」、「地」の象嵌がある田付流の鉄炮 (徳川美術館所蔵)

田付流の雛形を指定して鉄炮鍛冶に製作させても、藩、制作者、個人の好みにより銃の形態を変化させていたことがわかる。



尾張の鉄炮鍛冶 国友勝左衛門、勝左衛門の息子鉄三郎の鉄炮 (名古屋城所蔵)

国友に申付けた雛形より台尻が丸く、袋(箱)火蓋もなく、形態が異なっており、一見して田付流の形態とは判断し難い。このことは流派の鉄炮形態が厳密に統一され製作されているとは限らないことを示す。使用する個人の好みにより形態を変化させたり、鉄炮鍛冶が別の流派の特徴を取り入れたりして変化が現れたのであろう。

ちなみに大垣藩、尾張藩以外で田付流を流儀としている藩は、肥前國平戸藩、下総國古河藩ぐらいで意外に少ない。

また、酒井流では稲富・田付・田布施流三家に習って一派をひらいている。このように田付流を修得してから、他の流派を学び一派を起しているものもある。

慶長期に30程の砲術流派が存在していたが、所氏によると一代限りの流派を含めて江戸時代を通じて400以上あったという。田付流以外に多くの流派が同様に一派を作ればかなりの数が出来たであろう。

流派に忠実に造られた鉄炮の形態に加えて、自分の趣向により変化をもたせた銃の形態の数を見れば数えきれないであろう。

以上のことから、所氏願望の調査を継続するにもかなり時間をかけ調査しなければならないであろう。

田付流鉄炮一覧(寸法cm)

名称	全長	銃身長	口径	目当	銃口	カラクリ	火蓋	時代
徳川美術館所蔵の「地」の象眼	97, 0	64, 0	2, 3	先・前共目 当スリワリ	丸柑子 丸銃身	平カラクリ	袋(箱) 火蓋	宝永4年
尾張藩所持の「宿」 名古屋城所蔵	99, 2	66, 9	2, 7	先・前共目 当スリワリ	丸柑子 丸銃身	平カラクリ	袋(箱) 火蓋	文化11年
名古屋城所蔵鉄炮 雛形	103, 8	69, 4	2, 2	先・前共目 当スリワリ	丸柑子	不明	袋(箱) 火蓋	宝永4年
雛形に製作された 鉄炮林利一氏所蔵	98, 2	65, 5	2, 8	先・前共目 当スリワリ	丸柑子 丸銃身	平カラクリ	袋(箱) 火蓋	宝永4年以降
大坂城所蔵	186, 5	145, 5	2, 0	先・前共目 当スリワリ	角柑子	平カラクリ	不明	慶長頃
田付左太夫の所有 の鉄炮	141, 1	142, 5	1, 32	先・前共目 当スリワリ	角柑子	平カラクリ	袋(箱) 火蓋	不明

5、所蔵されている史料

本来ですと一冊づつ解説をつけなくてはいけないので、機会があれば紹介したいと

おもいます。

1、家譜 田付兵助 初苗佐々木

2、生國書控 田付 兵助

3、家譜 田付左太夫

4、師訂第譜 上 (1)、(2)、(3)

5、摩訶止観治魔ノ法

中国随代の仏教書。20巻または10巻天台智ぎ(ちぎ)述。灌頂筆録。五九四年成立。止観という観点から仏教をとらえ、座禪に基づく修行の道筋を体系的にあきらかにしたもの。天台三大部の一つで、天台宗の根本聖典。止観。天台止観
〔日本国語大辞典 第二版〕、小学館二〇〇一年)

6、革案近理之重条 (1)、(2)、(3)

7、案代 鉄炮印接添書

8、鉄炮印接添書

9、鉄炮印接添書

10、鉄炮門弟古今名義

11、鉄炮扶問家訓式目 1 桐卷(松)

12、鉄炮扶問家訓式目 2 頓放卷(松)

13、鉄炮扶問家訓式目 3 楳不意卷(松)

14、六軸求中集 略解 地之卷 (4)

15、六軸求中集 略解 水之卷 (7)

16、躰縦右思出ノ草案

17、寒夜之図躰形之卷 全

18、寒夜之図略解 全

19、寛十二子 鉄炮品別一応指南

20、遺状 正澄

21、短参録 (1)

22、短参録 (2)

23、短参録略抄 全

24、求中集 1、2、3、5

25、求中集 7、火之卷 水之卷 風之卷

26、求中集 8、空之卷

27、扶問評淵 1

28、獨居笑談 1

29、獨居笑談 2

30、獨居笑談 3

31、紅近集略抄二本末共 四

32、水月集 卷之一

33、水月集 卷之二

34、水月集 卷之三

35、求中集 地 水 火 風 空卷 全 (6)

- 36、寛文十五巳年七月以後 正澄 虹詰 飛風 絲工日記
- 37、電粉玉並町打虹寸 全 正十
- 38、傳本 習義
- 39、傳本 大目錄定法 近理之園老巧之卷
求中集 大秘極集 玉類集 寒夜之図
- 40、蠟有録 坤卷
- 41、師訴第譜 下 1 2 3
- 42、草案 近理之図 略解 全
- 43、虹近集 秘奥卷
- 44、虹近集 切寸卷
- 45、虹近集 略抄一本末共
- 46、虹近集 鍛形卷 四寸卷
- 47、浪船台風乗之記
- 48、全草案 電附玉録本軸並傳本条目 (2)
- 49、短參録卷 第一
- 50、短參録卷 第二
- 51、短參録卷 高倍之巻
- 52、短參録卷 全五軸
- 53、述録読語 第一 近理 求中
- 54、日記 (1) (2)
- 55、放船軍利之巻 2種あり
- 56、入門初心慰草抄
- 57、数集全兼略抄
- 58、家督前後書付 田付景賢

おわりに

鉄炮伝来後、まもなく鉄炮術を家業とする炮術師が出現した。津田、稲富、井上氏らがそうであり、田付氏もそうした流れにあった炮術師であった。

慶長18年(1613)、徳川家康に仕えた3代目兵庫助景澄は、田付流炮術師として一流を興した。景澄が父祖に炮術を学んだ可能性もあるが、他流の鉄炮秘伝を学んだ可能性はさらに強い。鉄炮の形態は流派の特徴であり象徴でもある。

田付流鉄炮の特にスマートな銃身に銃床末端の台尻が直線的にきれ、銃尾がくびれた、その直線的で内角的な形態こそ田付流であり、他の流派には見られない特徴である。

このような形態が何時の時点で派生したかは今後の研究に譲るが、少なくとも宝永4年の墨書銘があり、大垣藩田付氏の系統の鉄炮発見によって、18世紀代の段階での特徴的な鉄炮出現の可能性を示唆するところとなった。ある意味で、特徴的な流派の成立は、またその特徴として鉄炮形態に表れるのかもしれない。

ちなみに大垣藩は天文4年(1535)3月、美濃国守護土岐氏の家臣宮川安定が築造したと伝えられている(一説に明応9年(1500)2月、竹腰尚綱が創築したという。)築城以来、城主はあわただしい交代している。慶長5年(1600)関ヶ原の役で陥落した大垣城は、番城となり、翌6年2月まで松平康重が城番として在城した。

慶長6年(1601)2月、石川康通は関ヶ原の役に戦功があり、上総国鳴渡より5万石で大垣に入り、ここに大垣藩が成立した。それ以後在城した城主はいずれも徳川氏の譜代であった。慶長12年(1635)摂津国尼ヶ崎より戸田氏鉄が10万石で入封した。以来、幕末まで大垣藩は戸田氏の領有するところになった。

戸田氏と田付家は、慶長10年(1605)に田付四郎助景澄の三男正景が戸田氏に仕え、以後幕末まで続いた。大垣藩での田付家の役職は鉄砲師範としてであるが、鉄砲組の組頭であった。『東海藩史大事典・中部Ⅱ』雄山閣 昭和64年

この報告は、「日本の砲術展—和流砲術から西洋流砲術へ—」の図録に投稿したものであるが、紙面の関係から略されたので再報告したものである。

最後に、大垣藩田付氏の史料を提供して頂いた田付氏、板橋区立郷土資料館の小西氏に感謝申し上げたい。

注1 「銃砲史研究」 日本銃砲史学会

第173号	「砲術流(派)の調査」	その1	昭和60年10月
第174号	<承前>「砲術諸流派の調査」	その2	昭和60年11月
第197号	「砲術諸流派の調査」	その3	昭和63年3月
第198号	「砲術諸流派の調査」	その4	昭和63年4月
第200号	「砲術諸流派の調査」	その5	昭和63年6月
第202号	「砲術諸流派の調査」	その6	昭和63年9月
第204号	「砲術諸流派の調査」	その7	昭和63年11月
第206号	「砲術諸流派の調査」	(最終回)	平成元年2月
第234号	「砲術諸流派の調査」	(補遺)	平成3年11月

注2 「田付流御鉄砲目録」 徳川黎明会所蔵

注3 山上八郎著『兜の研究』 昭和41年 大東社

凡例

文中に句点(。)、読点(、)を適宜加えた。

「中島流とその砲術型」

霜 禮次郎

1. はじめに

中島流は江戸幕府が安定した時期から、近海にロシア等の外国勢力が出没し始める幕末まで、主として大筒（50目玉以上）による棒火矢などの火術を中心とした砲術を得意とした。よって我が国における西洋流砲術の導入は比較的容易に行われたと考える。

2. 中島流 流祖中島太兵衛長守について

元禄7年生（1694年）。貫斎と号し、大阪大番の与力であったが、若年の時から砲術を志し、武術流、自得流そして佐々木流を紀州和歌山の人、佐々木浦右衛門成季に学んだが、後、佐々木の勧めにより三流を合体し、家名をもって中島流を興した。宝歴12年（1762年）69才で没した。

中島流砲術管闈録卷之一

同防流祖中川篤俊門人棟居長守著述

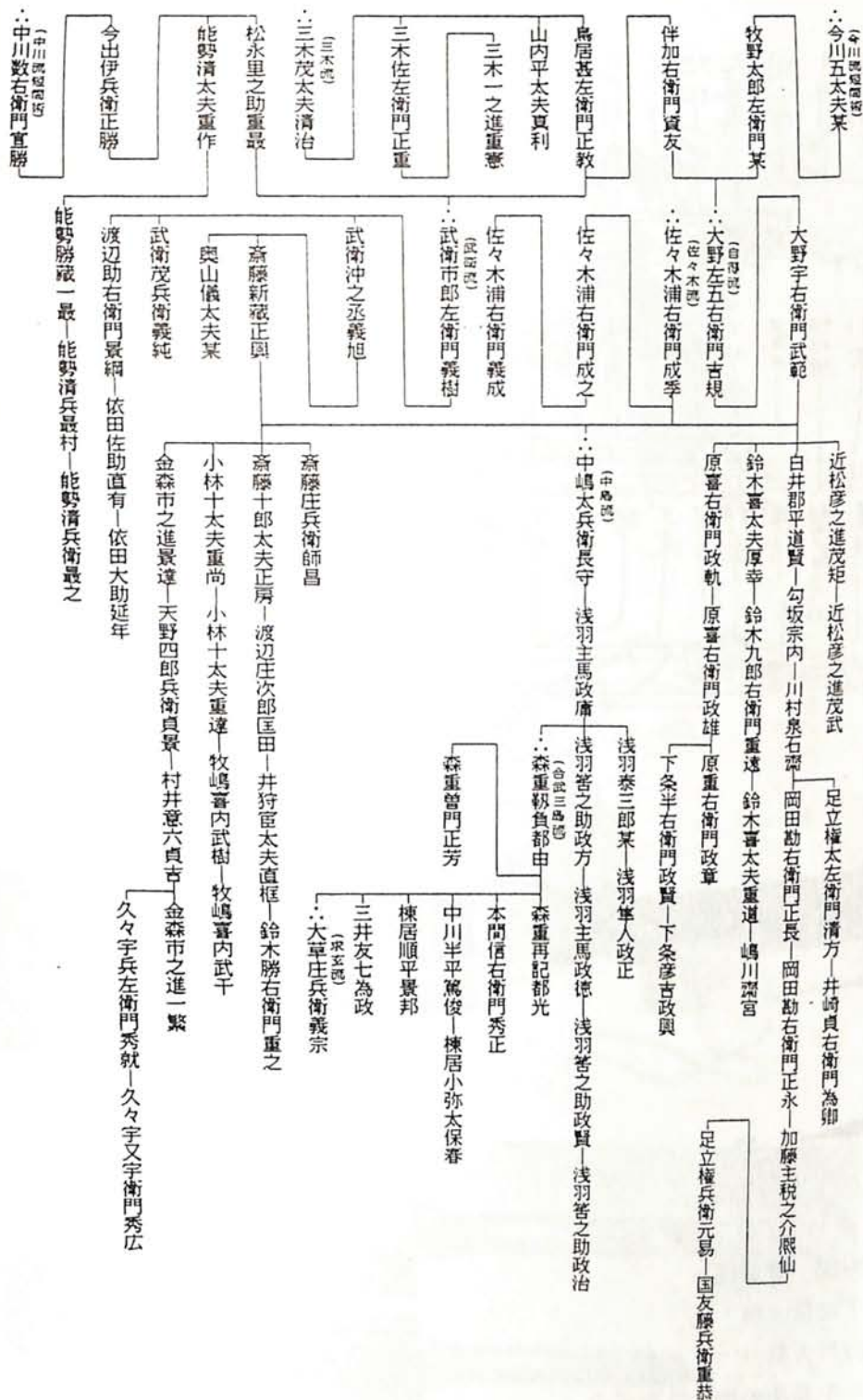
銃砲發端之史

一
夫レ銃砲ノ始ルイテ尋ルニ古シ南發國
茅都芍ノ帝王頑邪叛祖ノ代ニ當テ榮光
八州ノ内荒學厄國ニ於テ獨ノ兒女庭前
ノ相子ヲ取テ押シケルニ羊傍ニ居夕リ
シリ彼相子ノ實飛テ羊ノ服ニ入り忽盲

天保十四癸卯五月七日

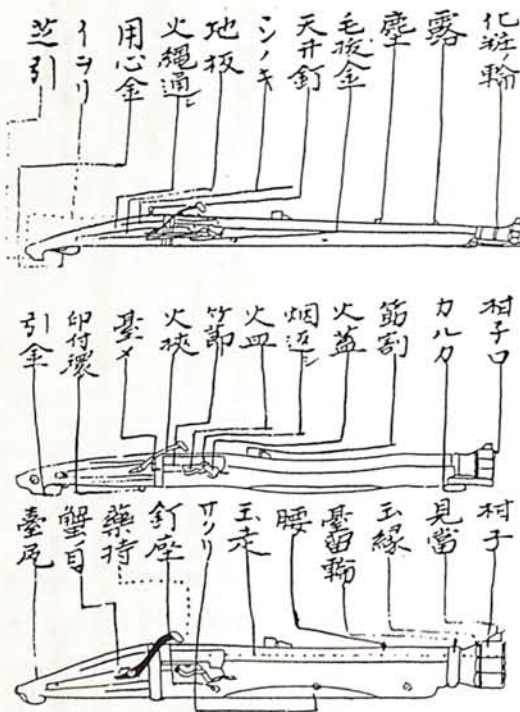
棟居長守

3. 中島流の系譜 (所氏による)

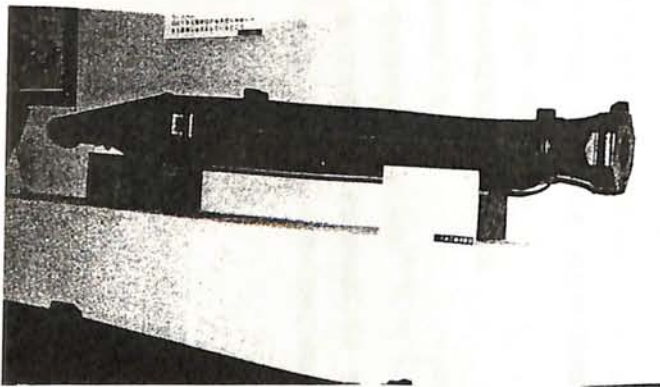


4. 中島流で用いられたと思われる火縄銃の特徴：銃身の「柑子」について

中島流炮術管闋録



(文献1より)



種子島鉄砲館 展示銃

上：1貫目大筒

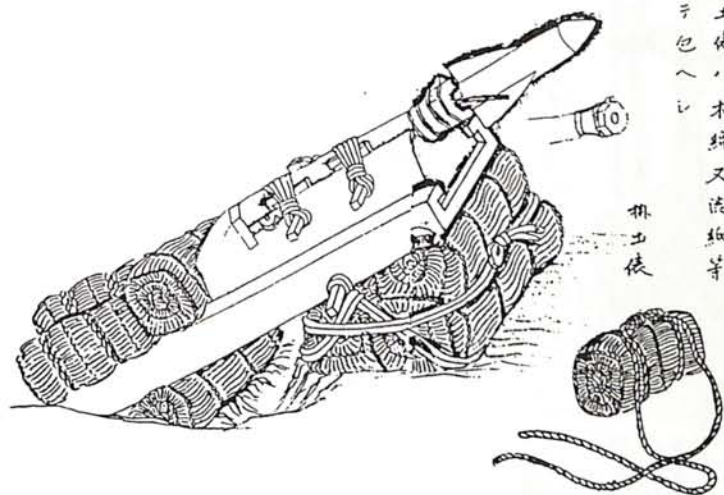
下：60目大筒

いずれも中島流の柑子を有する



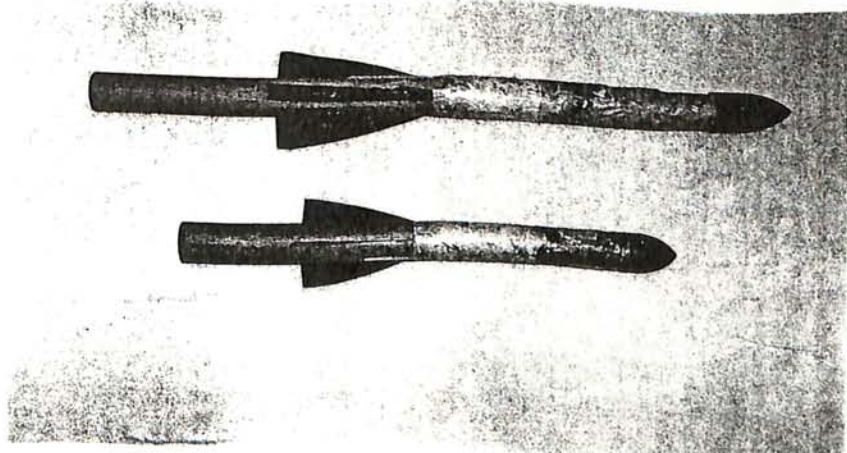
SEME KAKAE NO OZUTU

5. 中島流の棒火矢の打ち方 (文献1より)



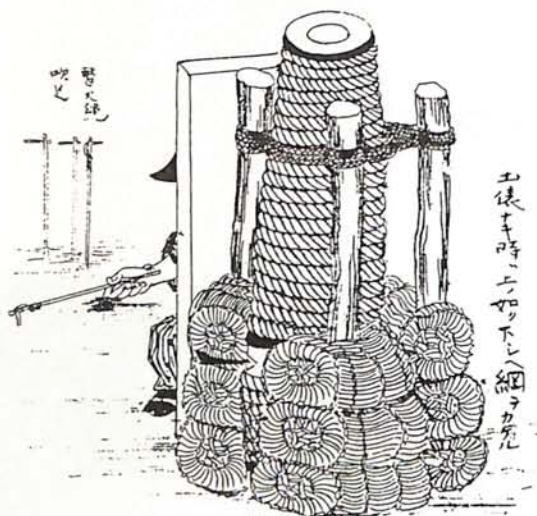
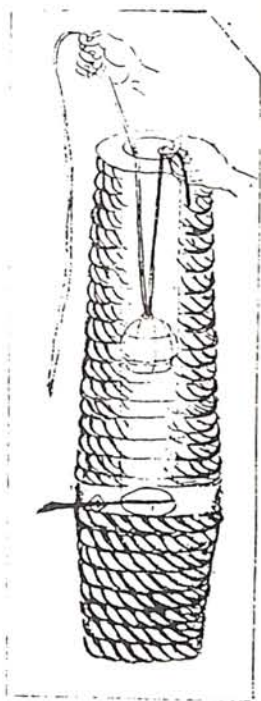
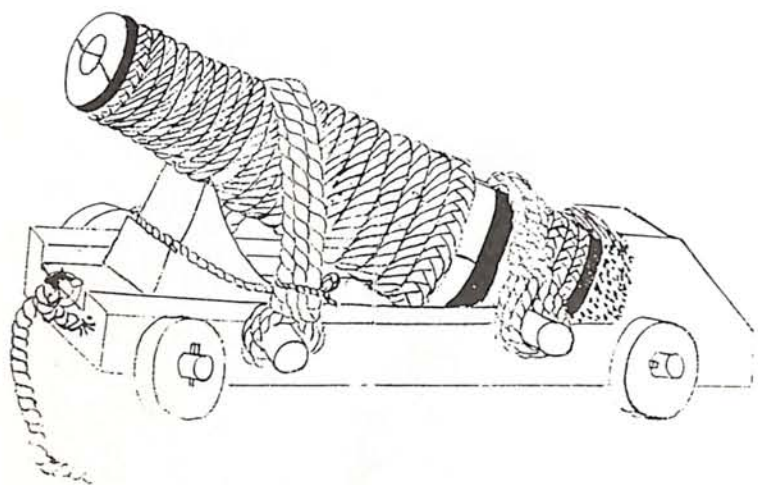
一極打櫓臺任拂之圖
 拂土使ハ木綿又流紙等
 ニテ包ヘレ

拂土使



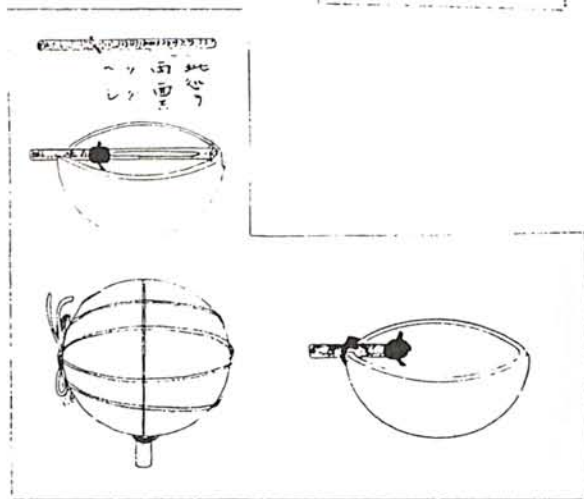
棒火矢
 (著者蔵)

6. 木砲と鉄炮烙 (文献1より)



火使す時、下如ッ下レ細ッカ死

筒下ハ
筒ヲ引ク
カボヲ
堀リスクレ
山モリト入レ
其邊ヲテ
折リシキテ
筒ヲ危シ
加地ニシテ
上リヨク
引合



竹道火

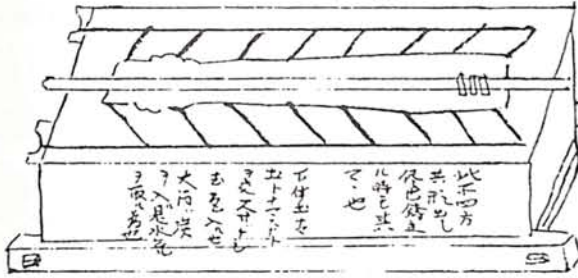
金道火

詰棒鉄磨キ

一寸道大ナル
昔ノ長二寸ヨ
ミセリテ詰ワ
ク

7. 大筒、大砲による幕末の海防と中島流砲術

而して其の上より
大筒ハ其の筒口
ニテ下ヨリ登湯スル
其目玉迄ハ一方ノ
鉄口ニテ凡ソ又モ
三方ニ行一考鑄ロシ
ハ凡ソ又モ一考
ニテヨシ



此は上下ノ筒口
定木ニテ是ヲ見テ
イカクモヨリ合ニ
ル

此は四方
共ニ成リ
俵也鑄立
ル時モ其
マデ也
下付出を
五トテト
又ノ分ト
あるハモ
大筒ノ
ヲ入見水
ヲ取ル



一ニヤメ目位ノ筒口ノ留金
吹様或は極長ニシテ三分
ヨシトクニ有クヤメテ吹セ
前又ロメ又キ此ヲ出テヨシ
一カ子ヲ大筒留金上ノクル
ノセ置テカクニ方ヨリ落
毛金入ル時モ其
時ハ何程入テモ
湯ニ入ル 然レモ全
入直シテ湯ヲ下
ニ加減水也

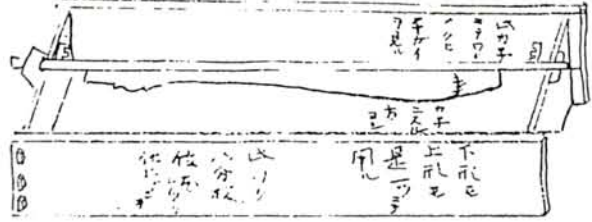
此は上下ノ筒口
定木ニテ是ヲ見テ
イカクモヨリ合ニ
ル

鑄筒製作之卷
(文献1より)



筒ハ

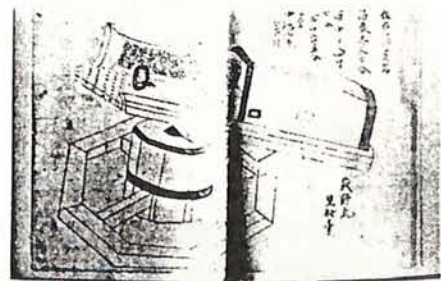
此は上下ノ筒口



箱ワリ



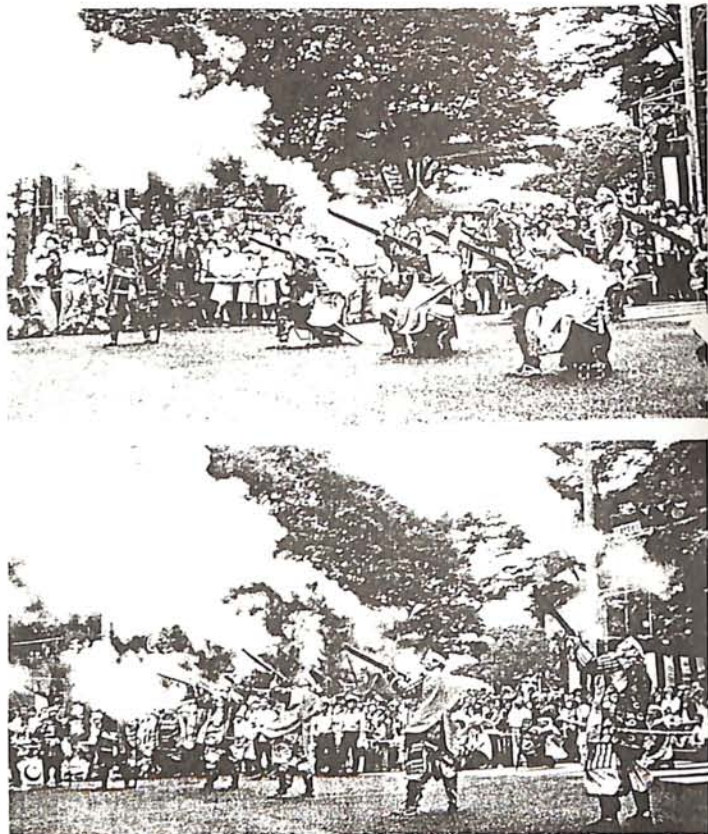
安政年間、大間備えの300目大砲
(岩手県立図書館蔵)



安政年間、佐井備えの700目火矢筒
(岩手県立図書館蔵)

盛岡藩は中島流が主流で、火矢筒と称する短い筒であった。
(文献3より)

8. 中島流炮術の伝承



中島流鍛錬巻

真之千前之夏

一 銃砲ノ指程石同所火銃ヲイトシ前ノ如クニ前ヲ据ヘ火銃ノ
先ヲ左ノ手ニ渡シ火銃ヲアケ火銃既取ムヘレ立揚テ左ノ足
ヲ踏出レ右ノ足ヲモ二二三前ノカ子ニ踏出シ放シ任地同所

懸臺之夏

一 銃砲持出坐ニ着逆ハ石同所火銃ニ火銃ヲ据左ノ手ニ据ヒテ

キ出シマテニ左ノ足ヲ前

トワレテ足ヲ引石ノ如ク任齊キヤ

諸懸臺之夏

一 足ハワックハイ凡云鳥環キ時即ニ用此夏ニ坐ナトスレ懸臺
成カクキ時即ツクハイ而腰ニ面ヒナラ付守申候銃砲ヲ居
リ中リ能ナリ

蝦ハイタメノ夏

一 細道杯ニテ大器守時軍用ニ入ヌアリハラハイテ話ヒナラフ
ケキヘレ常ニ守習直ヘシ

(文献5より)

9. 文献

- ① 「中島流炮術管闕録」『江戸科学古典叢書』43、所荘吉解説、恒和出版、S57年
- ② 宇田川武久、『江戸の炮術』、東洋書林、2000年
- ③ 会田金吾、『蝦夷地鉄砲伝来と北方防備の大砲』、S54年
- ④ 所荘吉、「砲術諸流派の調査その5」『銃砲史研究』No.200、S63年6月
- ⑤ 「中島流鍛錬巻」旧安斎氏蔵
- ⑥ 霜禮次郎、「中島流の火繩銃」『銃砲史研究』No.339、H15年5月

演武：柄台の型



紀州鉄砲まつりに参加：棒火矢の型



森重流砲術の元祖と成った森重靱負都由は字を仲美と云う。靱負又は武平と通称し号を鳥山・独立軒と称した。武術流祖録に依ると「周防末武の人」とある。これは山口県下松市の花岡にあたり、此処を旧地名を末武庄と云った。輪池叢書の「森重靱負説話」に「先祖は大内家に属し、周防の作城を守りし者にて御座候所、大内家滅亡の時より牢浪いたして改名し…勝屋と称し、又内山とも名のる。その後改めて森重と称号」とある。武術流祖録には「十八才の時に故国を辞して数邦に遊ぶ。火術に達し、安盛流・中島流・遠国流・禁伝流その他の諸流を学んで蘊奥を究めた。後、山本良一に従って橋詰廻新斎流合武伝法を学び、また古伝三島海戦法を得て、甲州・越後の兵学数流の要旨を聞いて火・砲術に付け加えた。…合武三嶋流と云う」とある。

元祖となった都由は、享和三年の春、兵学・砲術を以て幕府に召し出された。御書院与力と成った都由は、幕府の「蝦夷地火術取調御用被仰付」の命令を受けて、北方領土の防衛の任務に就いた。北方防備の為に北の地を、三回も訪れて役務を尽くして、文化十三年六月四日五十八才で死去した。

嫡子の森重再記都光は、父都由の家督を十才で相続した。若年寄京極周防守は都由の名声を高く評価して、二代目都光に対して流名を「森重流」と改称する様に命じた。元祖に従った全国二千八百名の門人は、此の快挙を喜び「森重流」と改称をした。

元祖の偉業を継いだ都光は、都由の門人三井為政が後見人となり、父の合武三嶋流・中島流等々を学ぶことになった。十三年間に渡り合武三嶋流をことごとく学んだ。

しかし森重再記は、京極周防守より「森重流」の称号を賜ったが、全ては中島流や安盛流の他流砲術であった。森重流と称する独自の砲術が無い事に苦悩を続けた。森重再記は二十二才の時に一念発起して、総ての官職を辞退して全国武者修行に旅立った。二十有余年の長きに渡り、諸国を巡り兵法・火術・砲術を研鑽した。四十余才の時に都由の残した術技にたいして、諸流を学んだ経験と、独自の工夫を加えて新たなる術理を加えて、独自の「森重流砲術」の砲技を創作した。これに依って森重流砲術の開基となる。ついに新しい森重流砲術を完成した再記は、砲術道場を開き神器館と命名した。砲術を砲道と称し、鉄砲道を説いて多くの門人を育てた。

森重再記都光はト秋と称し、字を公民、号を一水・竹山・貫々斎または西山と称した。俗名は伍介と云った。後年は蘇門・再記と名乗った。住んだ家を月之丸家と称したり、蟹庵と自称した。都光は父の墓石と共に「竹山森重先生之墓」として現存している。三代目を継承した弟の武平は、嘉永二年に佃島にて火術演武を行った。明治維新となり静岡県に移住して死去した。これにより森重流の古式砲術の終焉を迎えた。昭和になって安齋実氏の努力によって、森重流砲術の復元が行われ復興が成された。

居放しの形



- 41 -



森重流砲術 手法要訣

居放之形 輪火縄一口火 但輪を左の腕にかけて火先を二三の指に挟む也 図参照

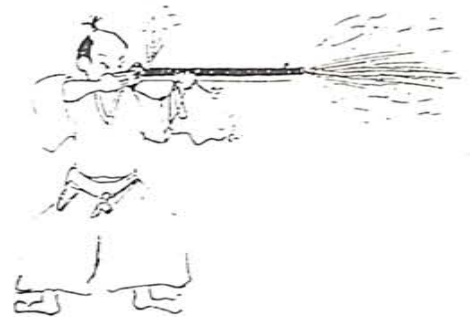
- 控 場 火薬装填の完了後は即臨戦態勢の左胸前構えに持ち変える。検分者または貴人が右手側に居るときは、出足を貴賓席側の足側から出ては成らない。
- 出 場 控え場からは左足より踏み出す。
- 検 分
見渡場 検分見渡しの場に到り、左右の足を揃えて平座する。筒を左膝頭の前に筒を立てる。
- 礼 法 右手を差し伸べて一礼をする。
- 筒捌き 右手で台尻を掴み、左手で筒を取り上げと同時に両足を爪立てる。
- 的前歩 左足より踏み出し的場に進む。
- 的 前 両足を踏み揃え止まる。ひと時を的を見据える。
- 平 座 右足を後ろに引き、左足を寄せて両足を揃える。その場で膝を付き平座する。
- 筒 立 筒を左膝内角に立て、右手を筒から離して膝の上に乗せる。
- 調 息 三呼吸して精神統一を成してから、身体を曲尺の構えにして、顔を的に向けて正視する。
- 火挟起 親指とあとの四指を持って火挟を引き起こす。
- 火縄付 右手で左手から火縄を取り灰を吹き払う。火縄を挟む。
- 横胸前 右手で再び台尻を取り、筒を横胸前に携える。
- 火 蓋 右手中指で火蓋を払い切って開く。
- 筒摺出 右手で台尻を掴み、前に筒を摺り出す。
- 先目当 的星の左右を見ながら筒を心中に揃えて、ゆっくりと筒先を釣り上げる。先目当を的中心に筒先を固定する。
- 引 上 先目当を固定して左右に振れない様に台尻を上げて、静かに台尻を頬に付ける。

- 的目付 そのまま筒の先目当てと前目当てを合わせる。
- 発 射 無心にして確かに放すべし。
- 残 心 放してから、にわかには身体を崩さず、残心の息をしばし保ちてから後に、台尻を元の左膝内角に降ろして筒を立てる。
- 火挟持 右手の一と二の指を持って貝口の火縄を押さえ、火挟を軽く摘み上げて、火皿の間隔を保持する。
- 火蓋閉 火挟を握った位置で、三四五の指を揃え中指で火蓋を閉じる。
- 火縄納 右手一二の指を持って火縄を捻り取り、左手二三の指に収める。
- 筒 納 右手で台尻を掴み両足を爪立てる。次ぎに右手の筒を腰に持ち上げると、筒は斜め胸前構えに固定する。
- 廻 膝 左膝を浮かせて的に向け、続けて右膝も寄せ的に身体を向ける。
- 起 立 左足より一步踏み出す。続いて右足を踏出し両足を揃える。
- 退 席 左足から後ろに下がる。
- 検 分
見渡場 検分見渡しの場に到り、左右の足を揃えて平座する。
筒を左膝頭の前に筒を立てる。
- 当見極 右手を膝に乗せ、放した玉筋の行方を見定める。
- 礼 法 確認して右手を差し伸べて一礼をする。
- 火縄捌 左手の火縄を、右手二三指で火縄の先を取り、其の手で筒の中段を握ると、左手は筒から離れる。
左腕の火縄の輪を滑らして、右手小指を伸ばして受け止める。
右手の小指に移し取って、火縄の掛け変えを終わる。
- 逆筒捌 左手にて台尻を握り、筒を逆斜め胸前に構える。
- 爪 立 筒を取り上げると同時に両足を爪立てる。
- 廻り膝 右膝を浮かして身体を右に廻わすと、左膝を中心に下肢が動き、足先が的に向かう。
- 退 場 右膝を起こして、左足より踏み出して身体を後方に向けて進み控えの場に戻る。
- 控 場 両足を踏み揃えて止まる。
右足を引き、身体を廻して的に向き直り終わる。

二段の形



—44—



小銃習形 しょうじゅくじよう (一段から五段までである)

段打手法 三匁目五分玉より、十匁目玉筒に限り此を用いる

二段之形 火縄五尺五寸中に緒を付二重二口火縄之事 図参照

◎第一射之手前

- 控 場 火薬装填を完了させて置く。
- 入 場 定法の如くに出て、検分見渡場に踏み留まらず的場に行く。
足を揃え踏み止まる。
- 平 座 一步右足を引き平座する。筒を左膝内角に立てて的を視る。
- 火 挟 左膝を立てると、同時に火挟を起し、火縄を吹き挟む。
- 火 蓋 胸前構にして、右親指で火蓋を押し切って開く。
- 発 射 筒を持ち出し、左右釣り合って引き上げて頬に付けて、膝台の構えになり、引き金を引き射放す。

◎二段・第二射之手前

- 残 心 胸前構えにして腰を伸し切り、左足を鍵の手、右足を折式にする。火縄を取り左手に戻し、台尻を持って火皿を吹く。
- 捌 き 筒を外に返して機関部を下に向ける。
台尻の右手を放して巢口を持ち、台尻を下に廻して的に向ける。
そのまま筒を左側に振り廻して、左足後方に横たえる
- 玉込め 右手にて火薬と玉を入れてカルカにて突き固める。
- 筒引出 左手にて巢口を引き上げて、筒を上を引き起こす。
右手は筒の中程を持ち、左手を離して右手の下を持つ。
- 筒立て 両手にて筒を持ち上げて、肘を伸ばして左膝先に立てる。
- 捻廻し 両手にて肘の反動で筒を捻って廻して、筒を順に直す。
- 筒廻し 右手を離して筒を的に向かって押し倒して廻す。反動で下から上に廻って来る台尻を、右手で受け止める。
- 火 薬 台尻を取ってから胸前構えにして、火挟を起して口薬を入れる。

- 火 挟 火挟に火縄を挟み、火挟の中程を握り一と二の指で持ち支えて離さないで上げる。筒を目通り（水平）に持ち上げる。
- 発 射 火挟みを一と二の指で握ったまま、中指で火蓋を切る。立放構えのまま頬に付けて放す。
- 残 心 左右の足を揃え両膝を付き、両足を爪立てて座する。
- 納 め 火縄を取り火蓋を閉じると同時に、爪立てた足を解き平座する。
- 礼 法 貴人または検分役に、右手を床に付けて一礼をする。
- 退 場 筒を取り上げて左足を廻り膝にて、身体を的に向ける。立ち上がって左足より下がり、検分見渡し場に至る。
- 後作法 以下は定法通り、居放しと同じ作法。

参考文献

参考文献

- | | |
|--------------|--|
| 森重流砲術初授目録 | 森重流砲術研究会蔵 |
| 森重流砲術手銃類付免許巻 | 森重流砲術研究会蔵 |
| 森重流砲術手銃類附目録 | 森重流砲術研究会蔵 |
| 武術流祖録 | 日本武術資料館蔵 |
| 輪池叢書「森重鞞負説話」 | 国会図書館蔵 |
| 砲術図説 | 昭和六三年刊 安齋 實 |
| 日本武道全集第四巻 | 昭和四一年刊 今村嘉雄 |
| 日本武道大系第五巻 | 昭和五七年刊 所 莊吉 |
| 銃砲史研究四一号 | （合武三島流船軍学森重流砲術について 安齋實著）
昭和四七年七月刊 銃砲史学会 |

蔡忠純行

手鏡錄治官錄卷

- 一 小商打前之法
- 一 十支自三商打前之法
- 一 居放之法
- 一 一落放之法
- 一 中放之法
- 一 五放之法
- 一 逆藤之法
- 一 諸折放之法
- 一 腰放之法
- 一 二段之法
- 一 三段之法
- 一 四段之法
- 一 五段之法
- 一 兼皮操卷之法
- 一 腰早打之法
- 一 守早打之法

一 五早打之法

一 諸折早打之法

一 一落放逆進之法

一 疊備之法

一 五商打前之法

一 六支自三商打前之法

一 二十目三商打前之法

右表 二十三條終
手法現業口傳

一 三十目三商打前之法

一 五十目三商打前之法

一 一百目三商打前之法

一 腰放之法

一 五放之法

一 二段場折放之法

一 一落抱火火之法

一 五抱火火之法

一 胸台六三之法

一 一受元之法

一 一受元之法

右表 二十三條終

手法現業口傳

此三卷手鏡

頒附目錄也

多筆一了學

手法今既成

矣於平茲

授之深亦不忘

流祖之恩三

慎不致辱為

了學不何可

得何法佳

境也

上内水之甲台二成下
夏四月一辰

三嶋流伝

表序致及督督

香既隨卷 表直再記

野元 志

「幕末の大砲について」

—— 青銅の鑄造砲 ——

日本銃砲史学会 峯田元治

1. はじめに

1) 大筒と大砲

井上流伝書『鉄砲初学抄』¹⁾に次のようにある。

一、砲とは異朝に巨砲という本朝にて大筒という是也、銅鑄の大筒を俗に石火矢という、また佛郎機とて入子の大筒あり、是を俗に破羅漢という。攻城・守城・船軍に専ら用ゆるなり。或いは野合の戦にも用ゆべし、但し軽重長短の辨あり

2) 大筒の分類例

鉛弾重量百匁玉（口径 40mm）以上を大筒という。

一貫斎国友藤兵衛（1778~1840）著『大小御鉄炮張立製作』²⁾では、大筒を三種に区分けしている。（資料付図1・2・3）³⁾

「抱え筒」＝火縄銃を大口径にしたもの。抱えの大筒と称される。

「仕掛筒」＝抱えられない程の重量の大筒。台座・台車に据えて発射される。

「三貫・五貫・十貫目玉筒」＝葛・瓦付けで作る大筒。現在、一般的に大砲とも呼ばれている。

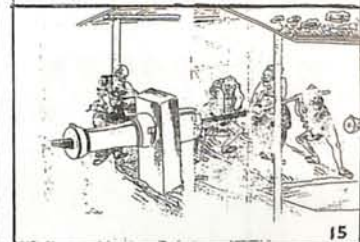
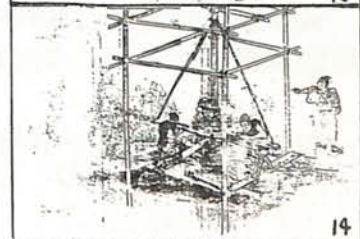
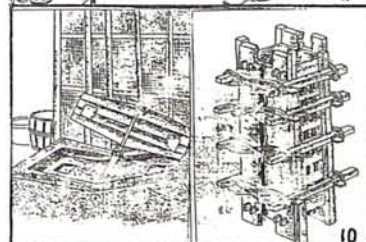
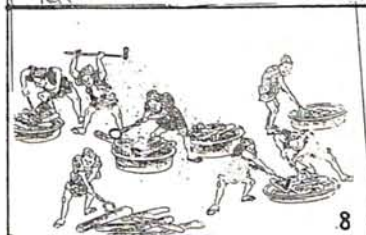
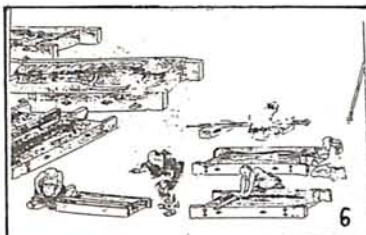
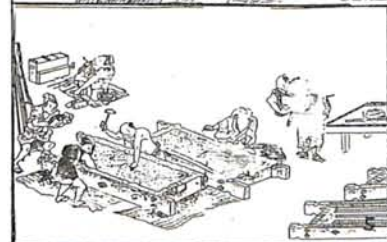
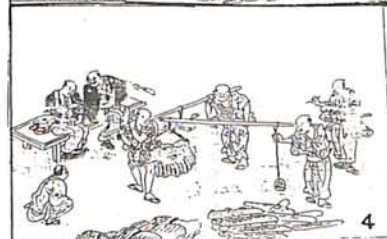
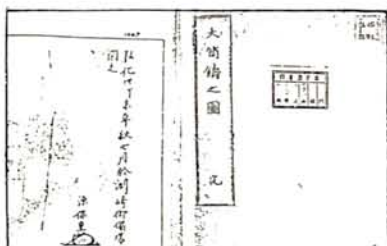
中島流においては、大口径の砲を「大筒・大銃」としている。

2. 大砲製造法二種

1) 鍛造法の例＝靖国神社付属遊就館蔵に「芝辻砲」として知られる3m余の大砲がある。「重ね張り」の一種“瓦付け作り”によるものである。慶長16年堺の鉄砲鍛冶、芝辻理右衛門によって開発創始された鍛冶の手法と考えられる。対して国友鉄砲鍛冶の手法は「短冊張り」と称して、真筒の周りに円周の長さの鉄を巻き付けていく方法である。（資料付図4）

2) 鑄造法の例＝『大筒鑄之図』⁴⁾弘化4年（1847）作に、当時の大砲鑄造の様子が描かれている。砂と粘土汁で鑄型を造り、ここに甌炉で溶融した金属を流し込む方法である。同時に中子（型）で砲腔内部が成形されるのである。

鑄造砲には青銅（砲金）製・鑄鉄製があり、後年鑄鋼製が造られる。



3. 幕末の洋式砲

弘化3年(1846)アメリカ東インド艦隊司令官ビートルが浦賀に来航し通商を求める。軍艦コロバス(全長58.5m、大砲92門)とヴィンセンス(全長38.6m、大砲18門)であった。江戸湾防備の大砲総数を凌駕する火力であった。ペリー来航より7年前のことである。

ここでは板橋区立郷土資料館に展示されている洋式砲を中心に、その概略を述べておきたい。

1) 陸用 20ドイム臼砲 (モルチール)

臼砲の創製は古く、ために種類はきわめて多い。和蘭陸軍においては29ドイム、20ドイム、13ドイムの3種の青銅(砲金)製臼砲を用いた。

海軍の29ドイム臼砲は鉄製であった。特殊なものとして39ドイム射弾臼砲・射石臼砲などが鉄製とある。臼砲は大きな仰角をもって、山間や城内など直視不能な目標に対して曲射弾道で、球形中空の榴弾(ボンベンやガラナートなど炸裂弾)を発射する砲である。

他に焼夷弾(ブランドコーゲル)、光弾(リクトコーゲル)がある。45度の射角で発射するのを常法とするが、陸用のものは30度~60度の間で撃たれる場合もある。射距離は装薬の増減により遠近を調整する。

佐賀県武雄(鍋島支藩)に高嶋四郎兵衛、秋帆父子が天保6年に鑄造し、——オランダ暦1835年、日本において最初に鑄造したるもの——

IN HET JAAR 1835. (HOLLANDSCH) EERST GEGOTEN TE JAPAN と刻印された20ドイム臼砲が残っている。原型は1817年のオランダマーリッツ製の中古もので、天保3年(1832)に輸入されている。

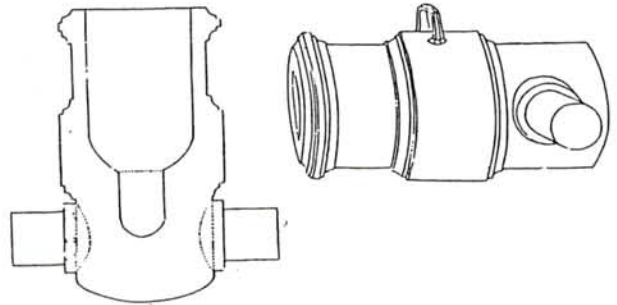
徳丸原演練の際、長崎から移送され使用された砲である。同寸法のものが板橋区立郷土資料館で今回観察可能となっている。左右の砲耳に「三番」、「大砲鑄製場」の銘が陰刻されていて興味深い。

20ドイム臼砲諸元 単位 (cm)

口径	弾径	膛長	薬室長	全長	重量(kg)
20	19.96	33.3	12.7	60前後	250前後

20ドイム臼砲弾着表

射角	装薬量(g)	距離(m)
30度	232.5	283.305
	468.8	1213.818
45度	232.5	463.287
	468.8	1345.623
60度	232.5	431.169
	468.8	1086.255



20ドイム臼砲

『西洋砲術便覧』

2) 噶論砲 (カルロンナーデ)

嘉永6年(1853)『西洋砲術便覧』のカルロンナーデの項は次のように記す。加農砲はその効力、諸砲に優れてこれを用いること既に久し、しかれども大弾丸を放つべきには、甚だ重大なるをもって世人、多く短砲を用いんと欲す。カルロン砲これによって起こる。はじめ安永4年(1775)エンゲルス人「カルロン」という者これを創製す。故に「カルロンナーデ」と名付くとある。

他にベックの『鉄の歴史』⁶⁾によれば、

イギリスではキャロン製鉄所が大砲の鑄造で名声を得ていた。その鑄造工場は、フランスのヤールスが見たときに、非常に大規模の工場であった。1779年に、ロバート・メルビル将軍が新しい型の船の大砲、すなわち「粉碎者」(スマッシャー)を発明した。

装填する火薬の量が少なく、しかも68ポンドの砲弾を発射でき、それによって一層大なる破壊力あるいは粉碎力を発揮した。この種の最初のものが1779年にスコットランドのキャロン製鉄所で鑄造された。

——この砲の小さなモデルが、今もメルビル家に所蔵されている。このモデルには「普通の船砲および榴散弾、焼夷弾その他を発射する大砲としスマッシャーおよびもっと小型のキャロナーデの発明者であるメルビル将軍にキャロン会社より寄贈、これらの砲は1779年にはじめてフランス船にたいしてつかわれた」と書かれている。

近距離の艦船に対して、大弾丸を撃ち込むために開発された砲。同じ口径のカノン砲に比較して、砲身が短く、肉厚も薄く軽量で、操作が容易であることを特長とした。狭い艦船での使用に適し海軍に採用されている。

多くは鉄製であるが、区立郷土資料館展示の砲は青銅製の24ポンドの滑腔砲である。1860年代には施条砲時代に移行しつつあり、ヨーロッパでは滑腔砲の終焉の時期にあたっている。この砲は国内唯一の希少なものと推察する。

弾丸は球形実弾、鍍殻焼夷弾(中空弾の一種)を発射できる。射撃法としては、平射で仰射に用いられることはない。

24ポンド船用噶論砲諸元 単位(cm)

口径	弾径	膛長	砲身長	全長	重量(kg)
14.8	14.6		147.9	173.4	1200



装薬（火薬）の量は至近距離においては弾量の 1/15でも可能であった。カルロン砲は 6、8、12、24、30、36、60ポンドと多数の種類がある。

24ポンド船用噐砲弾着表

射角	装 薬 量		
	弾量の 1/12	弾量の 1/8	
0度	2 1 2 . 4 m	2 6 3 . 6 m	実弾 11.25 kg による。
1度	3 1 7 . 5 m	4 1 6 . 3 m	
9度	1 2 3 9 . 0 m	1 6 2 4 . 4 m	

3) 12ポンド施条加農砲（カノン）

カノンはあらゆる戦いに対応できる大小長短の砲種を持つ、もっとも典型的な大砲である。長大な砲は城塞砲として、これに次ぐ砲は攻城砲として用いられ、艦船には短い砲、野戦においては軽便な砲、山砲には最少の砲が使用される。平射で実弾、烙丸、鉄殻焼夷弾、束霰弾、葡萄弾など発射する長砲である。

天保12年武州徳丸原演練の図（松月院蔵）に描かれた野戦筒の1門は 500目玉筒（2.5ポンド砲）で、天保6年にオランダから購入された 1787年製の中古の大砲であった。

ヨーロッパでは 1800年頃には滑腔砲よりも、施条砲が威力大であることが、実証されていた。幕府は文久2年（1862）、各種製銃機械をオランダに発注する。元治2年（1865）には大砲施条機械が到着し、関口（文京区）大砲製作場において同年、青銅製30ポンド施条砲など若干を鑄造している。

また、同時期に仏国製12ポンド施条砲を試験し、その命中精度、軽便なる点において、蘭式12ポンド施条砲より優秀であることが証明されている。

区立郷土資料館の大砲は、その蘭式12ポンド施条砲と同型のものであるが、施条加工の時期は不明である。

蘭式12ポンド施条カノン砲諸元 単位（cm）

口径	弾径	塘長	砲身長	全長	重量（kg）
12.1	11.63	182.0	191.2	206.55	1050

※砲腔調査——砲腔内部にシリコンを注入し、施条（ライフル）形状と砲底形状を取りだし観察した。これは砲腔及び施条が、核鑄法による鑄造で造られたのではないかとの疑問に答えるものになった。

施条末端と砲底には、機械加工による切削のバイト痕があり、核鑄法および手作業による加工でないことが証明された。

元治元年（1864）兵制改革がなされ、蘭式から仏式へと変革移行していくが、

蘭式大砲の製造はなお続けられている。

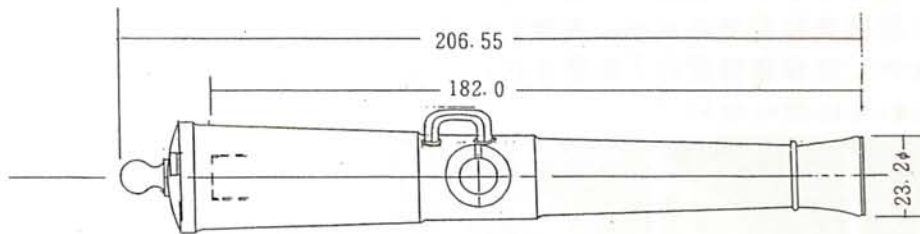
慶應元年（1865）関口大砲製作場においては、蘭式30ポンド6門、大坂城警備用仏式ナポレオン12ポンド砲50門、仏式4ポンド4門を京都警備用施条砲として鑄造している。松月院（板橋区）の高島秋帆紀功碑は、蘭式24ポンド砲が碑の本体である。

カノン砲弾着表 但し（滑腔砲）

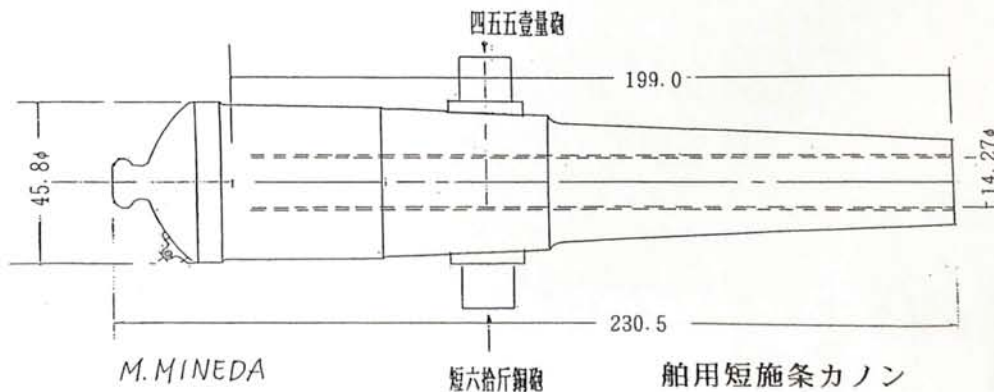
砲種	射角	装薬量（g）	距離（m）	
12ポンド	0度	2348	400	実弾 5.625kg による。
	1度		639	
	10度		2360	
24ポンド	0度	4219	571	実弾 11.250kg による。
	1度		719	
	10度		2795	

4) 刻銘“短六拾斤銅砲”船用短施条カノン⁷⁾

この施条カノンの口径は、20ポンド砲に適合する。「短」とあるがカノンであるので長砲に属する。長砲を呼称するには、その砲の口径に合致する鉄実弾の重量をもって何ポンド（何斤）というが、短六拾斤の銘と施条（ライフル）から尖長実弾の重量と考えられる。



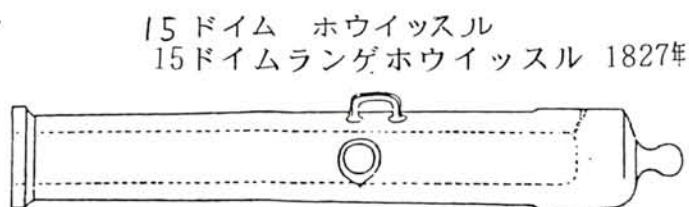
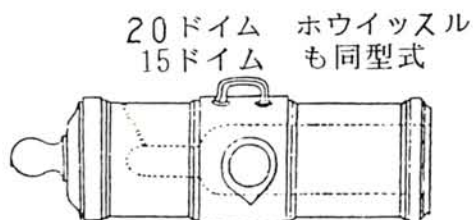
12ポンド施条カノン



5) 忽砲 (ハウィッスル)

区立郷土資料館にこの砲はないが、高島秋帆の徳丸原演練で使用されたという意味において大変重要な砲である。

和蘭では陸軍20ドイム(60ポンド)、陸海軍共用の15ドイム(24ポンド)の2種がある。曲射と平射が可能であり榴弾、束霰弾(ブリキドース)、照明弾、焼弾などを発射する。天保6年(1835)オランダ持ち渡りの15ドイム忽砲が6年後に徳丸原に運ばれている。渡来した時点で50年前の中古砲であった。



4. おわりに

展示されている以上四点の青銅製大砲すべてが、国産であるのか疑問も残る。

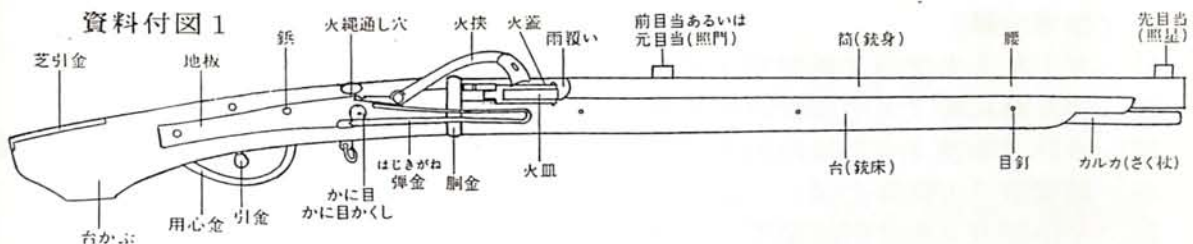
しかし、高島秋帆紀功碑の砲身は、民間の深川鋳物師、太田道久造で安政6年(1859)の銘がある。当時の鋳物師の先端技術と技能を識ることができる。

大砲の造り手として伝聞する高名な人々は、砲術家、設計者、製造監督者、あるいは製造責任者であるが、実際に仕事を請け負い作業をするのは鋳物師である。なかには幕藩官営の大砲製作場に匹敵する能力を発揮した鋳物師がいたことも忘れてはならない。^{8)・9)}



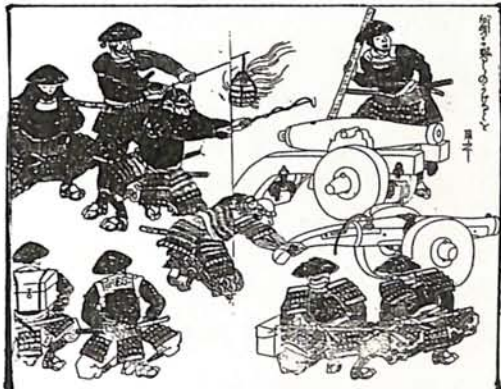
川口鋳物師増田数之助と四ポンド砲

(山田太郎氏提供)



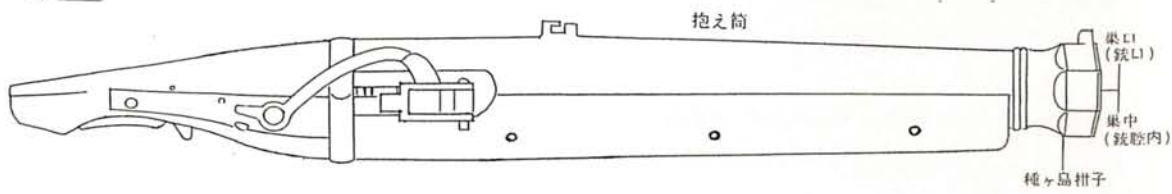
鉄砲各部の名称図

資料付図2 抱え筒

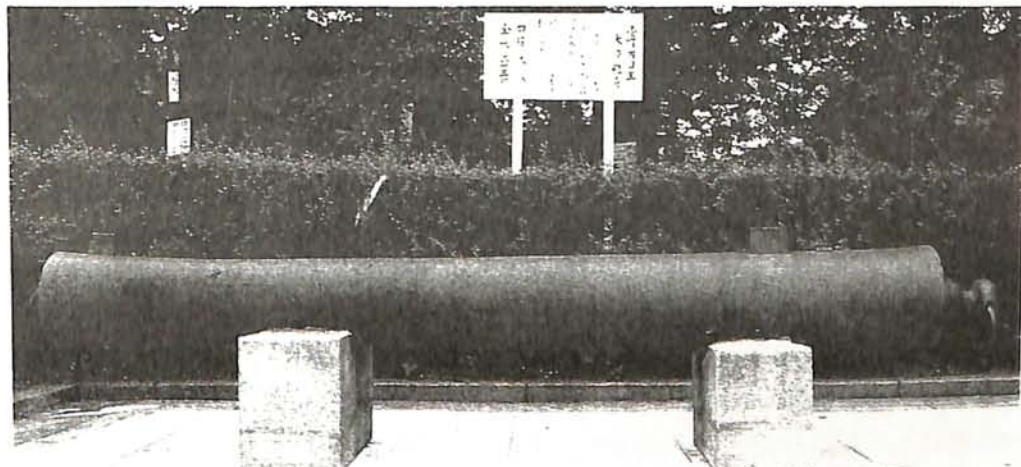


資料付図3 仕掛筒

『芸術秘伝図説』より



資料付図4



「芝辻砲」靖国神社遊就館蔵

『火縄銃の伝来と技術』佐々木稔編より¹⁰⁾

〈参考文献〉

- 1) 井上左太夫正路『鉄砲初学抄』（安政四年）1857
- 2) 国友藤兵衛『大小御鉄砲張立製作』（文政二年）1819
- 3) 所莊吉解説『中島流砲術管閣録』江戸科学古典叢書（1982年）恒和出版 557、569頁
- 4) 源保重『大筒鑄之図』（弘化四年）1847
- 5) 上田帯刀『西洋砲術便覧』（嘉永六年）1853
- 6) L・ベック著、中沢護人訳『鉄の歴史』第3巻第2冊（1975年）たたら書房 497頁～
- 7) 『ARTILLERIE VAN DE MARINE. REGLEMENTEN OP DE EXERCITIEN MET HET GESCHUT』……NEDERLANDSCHE MARINE 1865…… PL. I. PL. II.
- 8) 山田太郎『銃砲史研究』第155号「幕末の武蔵国川口における造砲事業」
銃砲史学会編 13頁
- 9) 吉村真義、徳弘孝輝訳『荷蘭新式施條砲圖説』（文久三年）1863 高島藏板
- 10) 佐々木稔編、峯田元治、関周一『火繩銃の伝来と技術』（2003年）
吉川弘文館 162頁

西洋流砲術の導入とその終焉

小西雅徳

はじめに

本格的な西洋流砲術の導入は、天保年間における長崎町年寄にして出島防備兼務の西洋砲術家高島秋帆（四郎太夫）をもって嚆矢とする。高島秋帆及び父の四郎兵衛と、秋帆の兄久松碩次郎ら親子の多大な努力によってこの事が図られたと言っても良い。

しかし、高島秋帆以前にも西洋流砲術の導入がなかった訳ではない。江戸時代前期の段階で紅毛流、ケンプル伝、あるいは阿蘭陀流等のオランダ砲術技術が伝えられていたが、それらは後に和流砲術へ組み込まれ、主流をなすには至らなかったが、日本の銃砲は元来、国外からの移入を原型にして工夫改良、独自の砲術技術を確立したのであり、海外からの情報及び享受については常に敏感であった。平戸で製造した1639年銘（寛永十六年）のオランダ式火砲—モルチール砲は、寛永の白砲と呼ばれ、幕府砲術方田付家に預けられたと伝えられている。また、田付家のモルチール砲とは別系統の白砲が「紅毛火術録」の大砲術として伝聞した経緯もある。日本で特に発達した大砲術としての火矢筒は、寛文年間に中国の火箭とオランダ渡りのモルチール砲との混合において生じたと三木流の砲術家は述べている。

このように、江戸時代における西洋流砲術の態様とその画期については、高島秋帆以前の研究が不十分な研究水準で停滞して検討状況にない実状を勘案するとしても、本格的な西洋流砲術の導入が高島秋帆によって図られたとする見方には異論がなかるうと思われる。

本稿では、高島流砲術の確立過程と、文久から慶應年間におけるイギリス・フランス式軍事技術の導入による高島流砲術の変容及びその終焉について述べたい。

西洋流砲術の導入

江戸幕府の鎖国体制後半の文化文政期には、日本周辺での所謂異国船出没が幕政の課題となっていた。その頃の海外情勢は、ヨーロッパにおけるナポレオン戦争の影響や欧米諸国の鯨漁による太平洋進出とアジアでの植民地化が密接に関わり、鎖国体制維持を困難なものとしつつあったが、幕府は現実的な対抗策を考慮するに至らなかった。しかし、天保十一年（1840）のイギリスと中国清国との間で生じたアヘン戦争の結果は、鎖国下の日本の対外政策変更を促しかねない状況を作り出すまでに至ったのである。この時点まで、一部の幕閣や蘭学者の注意を喚起する程度に収斂するかと思われた対外危機感、長崎の西洋砲術家高島秋帆が長崎奉行田口加賀守を通じて老中水野越前守へ提出した「天保上書」によって、少なくとも海防政策を進める上での解決策を示す提案として幕府側に受け入れ、また、その内容も海防政策に熱心な水野の意向にも合致するものであった。ここに秋帆が「天保上書」で提唱した西洋式砲術導入の機会を得、武州徳丸原での洋式調練実現へとなったのである。オランダ経由の銃砲使用と蘭書による軍事研

究の実際的な行動を示した、はじめての西洋式軍事技術披露として砲術史上に深く刻み込まれることとなる。

高島秋帆は、父四郎兵衛（荻野流・荻野流増補新術）の影響を受けて出島のオランダ人から先進的な砲術技術を学び、文政八年（1825）には大砲の注文をオランダに行っている。しかし、実際に大砲及び蘭書等の実物が輸入されたのは、7年後の天保三年（1832）になってからである。高島秋帆以前には幕府砲術方を含め、西洋式銃砲の輸入を試みてその研究を行った形跡がなく、この時点での秋帆の行動は異色であったといえよう。

天保三年～七年における高島家ほか五家による洋式銃砲の輸入状況を見てみると、モルチール砲1門、ホーイッスル砲1門、野戦筒2門の重火器4門、ゲベール銃等の小火器209挺を輸入している。これらの輸入に際して高島本家と久松家が群を抜いて多く、他家は従的な役割を担っている程度に過ぎない。天保六年には、武雄鍋島家のため20ドイムモルチールを製造、その発射技術をも伝授した。秋帆が天保三年の大砲輸入後、その同一形式砲の鑄造と発射技術を習得していたことを示している。そして天保八年輸入のミュエレン著「砲術入門」を底本として「高島流砲術」を天保十一年にはほぼ完成させ、以後伝書として流布した。「高島流砲術」は長崎一件後、威遠流、西洋流と名を変えつつも、維新段階まで流伝し続けたのである。

また、この間秋帆は長崎田上の地（年2回）で門人らと、輸入銃砲と洋式服装とでもって西洋式の銃陣を行い、西洋流砲術の実際論を経験しており、そうした成果の披露が、天保十二年（1841）武州徳丸原洋式調練（現在の東京都板橋区高島平）である。

合計	年次				町年寄
	天保七 (一八三六)	天保六 (一八三五)	天保五 (一八三四)	天保三 (一八三二)	
モルチール ホルウィッ ル銃 一	歩兵銃 一	ホワイッ ゲル銃 一	歩兵銃 一	モルチール 砲 一	高島四郎太夫
歩兵銃 二	歩兵銃 二				同清右衛門
スナッパ ー銃 六		スナッパ ー銃 三	スナッパ ー銃 一	スナッパ ー銃 二	同 八郎兵衛
歩兵銃 二	歩兵銃 三	歩兵銃 二	歩兵銃 三		久松碩次郎
スナッパ ー銃 一	歩兵銃 三	スナッパ ー銃 一	スナッパ ー銃 一		福田安右衛門
歩兵銃 三		歩兵銃 三			五島市之丞

長崎町年寄輸入銃砲一覧
（有馬成甫「高島秋帆」より出典）

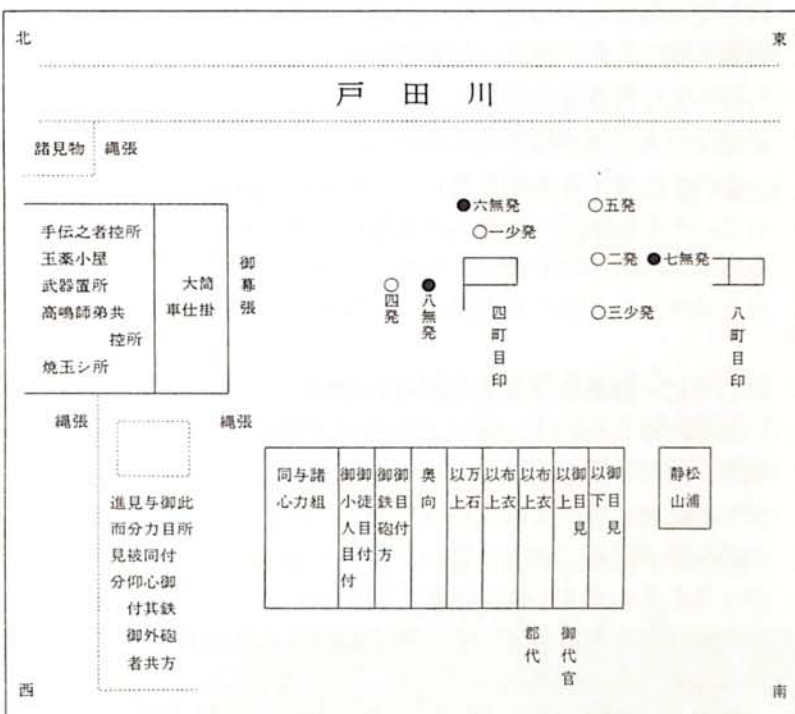
武州徳丸原洋式調練とその成果

天保十二年（1841）五月九日「高島四郎太夫砲術稽古業見分」と呼称された、徳丸原洋式調練は、オランダ輸入の銃火器とオランダ語による号令を発するなど、ヨーロッパ式軍隊形式の銃陣を展開したことで知られる。これは従来の和流砲術の概念を変える画期的なもので、既に実施していた長崎田上での西洋式銃陣とは別の意味での歴史的価値がある。調練の様子は、絵画（調練図）及び記録（稽古業書）として全国に伝えられた。

高島秋帆が唱導するオランダ式軍制による砲術技術は、幕府による制限を受けつつも、

内々に百名以上の人間に教授され、間もなく「高島流砲術」として西洋流砲術の代名詞として広く普及することとなった。幕府側への導入は、井上・田付の両鉄砲方によって妨害を受け停滞したが、旗本下曾根らを含め、諸藩で高島流砲術、即ち西洋流砲術を積極的に導入して軍制改革に取り組んだ。このことによって従来の和流砲術との軋轢を生んだとされる。しかし、長崎一件（秋帆の逮捕）によって一時期、西洋流砲術の動きが停滞したものの、嘉永六年後半から急速な普及を遂げることとなった。時代が西洋流砲術を要請したのである。

＜高島秋帆の徳丸原演練見取図＞



高島秋帆の徳丸原演練見取図（梶輝行「天保12年高島秋帆の出府と徳丸原演練」出典）

* 横浜開港資料館所蔵の小笠原貞藏文書「天保十二年五月徳丸原＝長崎地役人高鳴四郎太夫打祿之玉附図」と大東急記念文庫所蔵「試銃一見録」を参考にした。（梶 輝行作成）

西洋流砲術の終焉

嘉永六年（1853）のペリー来航は、開国か攘夷かとの国論を二分した。しかし、現実策として早急な軍事強化策を図る必要が、幕府を始めとして全国の諸藩にも波及、当面の課題として幕府では、江川太郎左衛門を中心としてオランダ式の西洋流砲術の導入を図った。一方で西南雄藩も、積極的に西洋流砲術の導入に動いたのである。

幕府は安政三年（1857）に講武所を設立したが、必ずしも充分な機能を成し得ず、文久二年（1862）にその発展形態としての幕府陸軍の創設を行った。講武所での砲術は、西洋流を主体とする方針にも関わらず、幕府砲術方の伝統的な和流砲術からの抵抗にあり、その対立軸を解消できなかったことに原因があった。更に砲術は、弓槍刀剣よりも格下であり、旗本を中心とするエリート武家集団への浸透が困難で、ついに幹部養成に失敗したことにあった。このため、陸軍所を創設、イギリス式あるいは慶應二年以降の

フランス式の軍制を導入することにより、高度な軍事化を図り反幕府側への対抗手段とした。また、同時に江戸小石川の関口に元治二年大砲製造所を設置、産軍一体化をも企図して、幕府の体制固めに務めた。

この間、高島秋帆監修による教練書が発行されて幕府あるいは諸藩の砲術家に多大な影響を与えつつも、むしろ秋帆がかつて唱導したオランダ式の西洋流砲術は旧式化して、ヨーロッパの大国イギリス・フランス式の軍事技術が、従来の日本の西洋流砲術の枠を越えて発展した。慶應二年（1866）、幕府の軍事顧問団の招請は、従来の西洋流砲術の終焉を意味した。これは和流砲術がそうであったように、西洋流砲術も奥義・秘伝という日本的な要素を内包したことによって、その旧態化を免れなかった。それと同時に、急速な欧米の軍事技術化の前に対処できなかった側面も否定できない。

このことは、幕末期を通じて、日本の西洋砲術を先導してきた高島秋帆の限界でもあった。その秋帆が、慶應二年正月に生涯を終えて、戊辰戦争を見ずに終えたことは、ある意味では啓示的であったかもしれない。秋帆の死が、天保年間以来の西洋流砲術の終焉を意味したといっても過言ではないが、その精神性は明治維新以降も生き続けた。

おわりに—慶應軍事改革と幕府の崩壊—

慶應四年（1868）に始まる戊辰戦争の勝敗は、そのまま徳川幕府の崩壊へと繋がった。倒幕・明治維新の立役者となった、所謂九州を中心とする西南雄藩の活動背景には、天保年間における高島秋帆の存在を高く評価してきた経緯があったものの、西南雄藩が本格的な軍事技術の確立を急いだ文久・慶應以前での、ベースとしての秋帆の影響が大きかったとする従来の指摘は必ずしも誤りではないが、それは表面的事象であるという指摘が近年なされてきている。洋式銃砲製造にかかる近代化と、軍事改革とは別の観点であるというものである。

つまり、薩摩・肥前・長州・土佐の主要な大名家は、倒幕に向けた体制準備の段階で、従来の西洋流砲術が世界の軍事技術の趨勢からみても旧式であるとの認識を持っていた。そのため、イギリス式の軍事制度と最新鋭の銃砲をグラバーらの武器商人の手を経て多量に入手する。この幕府に対抗した時点での西洋流砲術とは、欧米式の直接的な影響下での軍事体制であって、従前の高島秋帆らが中心として主唱してきた西洋流砲術とは明らかに相違するものであったという事実である。幕府においてさえ、講武所の解体に見られるように、歩兵・砲兵隊育成の状況は西欧の軍事顧問団によるものであり、直接的で実際的な指導法として西洋式の軍事を展開することを選択した。要するに、慶應年間における幕府、西南雄藩における軍事改革のスピードと体制作りの差を分けたのは、より直接的な対処法への取り組み方と、更に身分格差を越えた兵制改革にあるのであり、一方で幕府の軍事体制は身分を含めた旧習を改められず、結果的にそのことが幕府崩壊に繋がったとする砲術史観へと変わりつつある。

主要参考文献 有馬成甫「高島秋帆」、所杜吉「火繩銃」、板橋区立郷土資料館「高島秋帆—西洋砲術家の生涯と徳丸原—」、原口泉編著「幕末維新論集」、野口武彦「幕府歩兵」

鉄炮の材質と製作技法の自然科学的調査

齋藤 努（国立歴史民俗博物館助教授）

【はじめに】

鉄炮は16世紀なかばに日本に伝えられ、その直後の戦国時代から製作が開始され、その後江戸時代におよんだ。この間、鉄炮は各地の鉄炮鍛冶や、刀鍛冶あるいは野鍛冶によって製作された。現存の鉄炮を一見して明らかなように、その形状や法量はまちまちであるが、これは炮術の流派の反映である。

ここでは、日本で江戸時代につくられた鉄炮（火縄銃）の銃身表面を走査型電子顕微鏡で分析した結果と、文献史料による調査結果との関連性について紹介する。

【調査方法】

走査型電子顕微鏡で分析する試料は、標準的には径2cm程度の大きさである。金属メーカーなどでは生産物の品質チェック用に大型試料台を使うが、それでも最大でおよそ15cm角である。なぜこのようなサイズの制限があるかという、電子ビームを照射して分析を行うので試料を真空中に置かなければならず、大きさの決まった試料室の中におさまるようにする必要があるためである。しかし、歴史資料の分析では原則として外観をできるだけ損ねないようにして行うことが求められる。鉄炮の場合、最大

長およそ2mまでの長大な資料を、切断せずに分析しなければならない。そこで、鉄炮がそっくりおさまるような大型の試料室（2m長）を走査型電子顕微鏡に取り付け、その中全体を真空中にして、金属組織と介在物の分析を行うことにした（図1）。

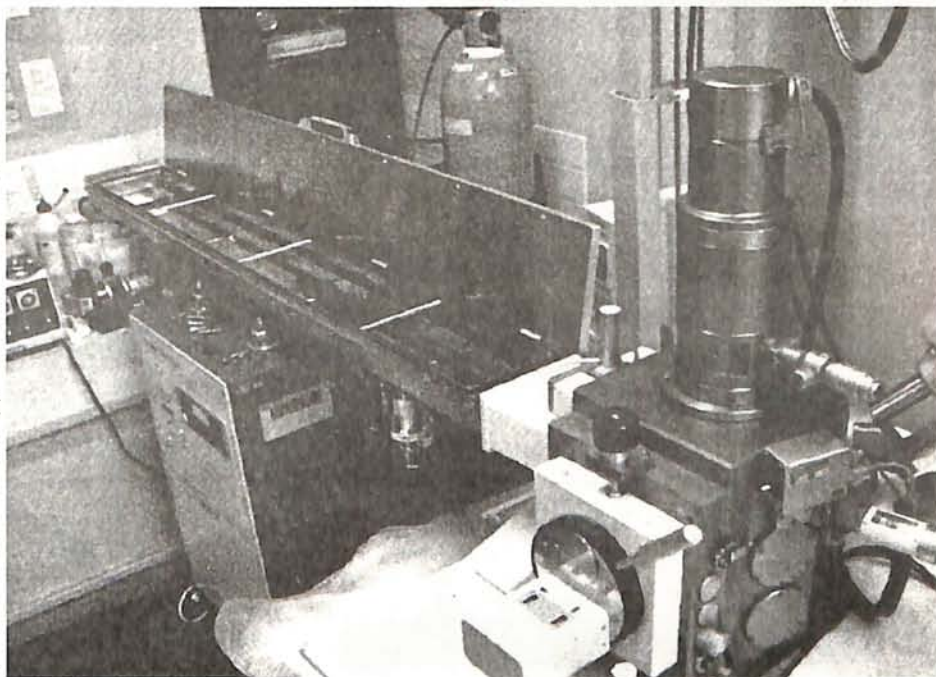


図1 鉄炮分析用大型資料室（2m長）を付設したエネルギー分散型特性X線検出器付走査型電子顕微鏡（SEM-EDS）

鉄炮銃身は錆に覆われているので、鉄の金属組織や介在物（鉄の中に含まれる非金属の不純物）を調べるためには、まず銃身底部など銃床に隠れる箇所を選び、表面の錆を落とし鏡面研磨する必要がある。これまでの分析結果と文献史料による調査から、銃身の先端部および末端部は、火薬の爆発に対する強度を高める目的で、補強のための鉄板が外側に鍛接されている場合があるため、その部分を避けて、銃身尾部の、火皿よりも内側に近い部分を分析箇所とした。

【製作技法の解析】

銃身をナイトールでエッチングし、金属組織を見やすくして観察したところ、ほとんどの銃に使用されている鉄の材質は、炭素濃度がきわめて低い（0.2%以下、大部分は0.1%以下）軟鉄であることがわかった。介在物の方向から銃身は二種類に大別できた。一つは銃身の長軸方向に延びているもの（図 2a）、他の一つは銃身の長軸に斜めの方向に延びているものである（図 2b）。

これを、砲術史料に記載されている銃身の製作法と比較してみることにする。鉄炮を



銃身長：69.2cm 無銘



銃身の反射電子像



介在物が銃身の長軸方向に延びている

図2a 籠鈍張で作られた銃身とその表面の
走査型電子顕微鏡写真



銃身長：75.7cm 土州住岡儀左衛門重行作 土州近森三五郎重吉 花押



銃身の反射電子像



介在物が銃身の長軸斜め方向に延びている

図2b 巻張で作られた銃身とその表面の
走査型電子顕微鏡写真

図2 2種類の銃身と反射電子像

【鉄炮の製作工程】

①鉄炮の作り方は、はじめに真金とよぶ鉄棒を作る。3尺の鉄炮ならば、1尺長い4尺くらいにする。作業の途中で真金が抜きやすいように、片方に藁を堅く巻きつける。

②つぎに瓦金とよぶ鉄板を、作る鉄炮に合わせて大きさと厚さをきめる。瓦金ができたら、これを真金に巻きつけ、火にかける時は真金を抜き、鍛練する時は筒にいれる。よく鍛練したら合わせ目を糊状になるまで加熱して圧力を加えて接合する。これを沸付けという。瓦金を巻いた状態を荒巻という。この後、筒をヤスリで研磨して部品をつければ完成する。この種の鉄炮は饅頭張といい、安物の規格品である。

③荒巻の筒に鉄の巻板を沸接して堅牢にする。これを葛巻といい、高価な物である。

④さらに葛をついで生沸しの荒巻にする。これを本沸しにして小口から金槌で詰めながら鍛えて接合する。これを詰巻という。この時、薬室の部分を二重巻にすることもある。この工程で銃口を薄く、銃尾を厚く葛巻にして完成に近い銃身の形にする。

⑤薬室部だけではなく、筒全体を二重巻張にする場合は、はじめの巻方と逆方向にする。これを二重巻張の筒という。

⑥つぎに厚手の鉄板を銃口に巻いて柑子とする。粗型の火皿を作って薬室部に埋め込む。

⑦こうしてできた筒を荒方筒という。荒方筒を堅木の穴に通して楔で固定して、刃金の錐で銃腔を研磨する。はじめ粗錐、仕上げは仕上錐をもちいた。

⑧つぎに銃尾にネジ錐をもちいて尾栓ネジを切る。

⑨ネジ切りが済んだら、ヤスリをもちいて、丸筒ならば上半を丸く、角筒なら八角に成形する。火皿の形を整え、前目当、先目当（照準器）などを沸付けにして尾栓ネジを作って留める。また銃身底部の数ヶ所に銃床を固定する目釘の座をつける。

⑩これで鉄炮は完成するが、つぎに前・先目当を調整し、銃腔の水平線上に、通常、6間の距離に的をおき、銃身の前後に十文字の糸を張って、銃腔からの黒点、星を見定める。このあと、銃身を固定し、こんどは両目当からの黒点に照準をあわせて照準器を調整する。これを出合定という。

このあと、堅木の古木で作った銃架にカラクリをつけた地板を埋め込み、火縄扶、外カラクリならば弾金というバネ、そのほか雨覆、煙返し、引金などをつけて完成する。

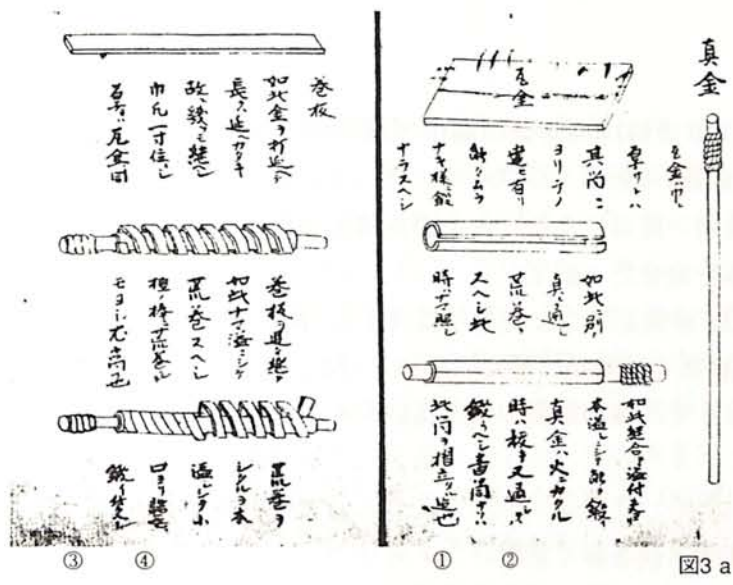


図3 a

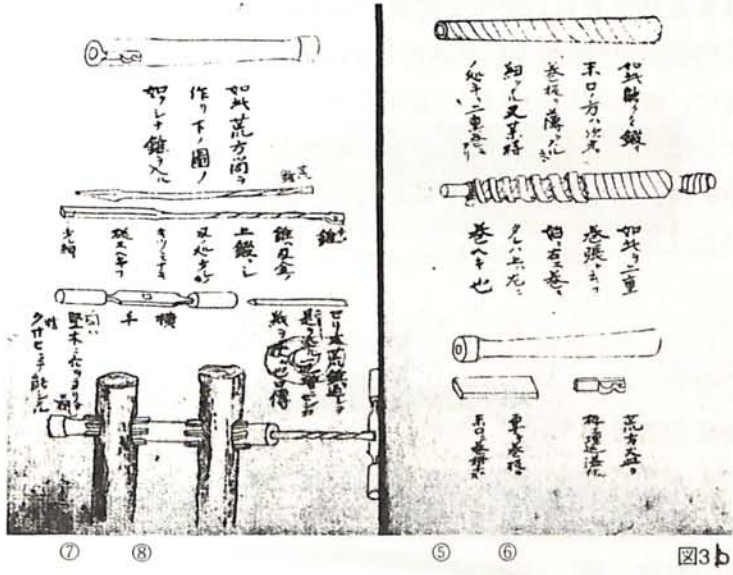


図3 b



図3 c

図3 鉄炮の製作技術を示す文献史料

含めた銃砲類の製作技術を示す文献史料は周防徳山藩中川篤の門人棟居長孝が天保14(1843)年に著した「中嶋流管窺録」(全21冊)の中の一巻「手前筒製作之事」と、近江長浜の国友鉄炮鍛冶国友藤兵衛一貫斎による「大小御鉄炮張立製作」の二書が知られている。ここには前者の一部を載せた(図3)。

これらから、図2aのような銃身は、鉄板をたてに筒型に鍛接する「鑑鈍張」(図3a)、図2bは鑑鈍張の筒の上に細長い鉄板を螺旋状に巻く「巻張」(図3b)に対応すると考えられ、このような分析法によって二種類の製作法が識別できることがわかった。

【材質の解析】

ほとんどの鉄炮では、銃身の介在物は鉄を多く含むリン・カリウム・カルシウム・鉄などを多く含むケイ酸塩が大部分を占めており、チタンを含む鉱物はほとんど検出されない。これは鍛接の際にフラックスとして使用された灰汁に由来すると考えられる。一方、日本刀などの刀剣では一般に、鉄の原料の砂鉄に由来する、チタンを含む鉱物(ウルボスピネルなどの鉄-チタン酸化物)が介在物中の主要鉱物として含まれていることが知られている。どちらの鉄素材も原料は砂鉄であるので、これらの差異は、製錬・精練工程の相違によるものと見ることが出来る。

刀鍛冶の作った鉄炮と刀

しかし、鉄炮の分析を進めていく中で、明らかに介在物中に鉄-チタン酸化物を主要鉱物として含む資料が見つかった(図4a-2)。この資料は岡山県に伝世したもので、無銘ではあるが、関連する史料から荻野流の鉄炮と考えられる(図4a-1)。岡山藩では荻野流が行なわれていたことからこの判断は裏付けられ、製作地も同藩領内とみなされる。現在福山城に所蔵されている刀鍛冶銘(備前長船鍛冶作)の荻野流鉄炮と形態が酷似することから、この鉄炮もまた刀鍛冶によって製作されたと推定してよい。これについては、江戸中期以降、刀の需要が減り一方で鉄炮の需要が増大したことから、刀鍛冶の中に鉄炮の製作を行うようになった者が出てきたことの反映であろうと考えられる。参考までに備前長船鍛冶によって製作された刀剣(図4b-1)の分析結果も一緒に示した。刀剣に通常見られる鉄-チタン酸化物が主要鉱物として含まれている(図4b-2)。



図4 刀鍛冶が作った鉄炮と刀の走査型電子顕微鏡分析結果

鉄炮鍛冶の系譜を引く製作者が作った鉄炮と刀

一閔藩に伝世していた、同一の製作者（久保田宗明）による短刀（「宗明」銘）と鉄炮（「久保田宗明」銘）（図5b-1及び5a-1）を分析したところ、短刀も鉄炮も、他の多くの鉄炮資料と同様のリン・カリウム・カルシウム・鉄などを含むケイ酸塩を介在物にもつ鉄でできていることがわかった。短刀の介在物はいずれもガラス質で、刀剣に通常見られる鉄-チタン酸化物の鉱物は検出されなかった（図5a-2及び5b-2）。久保田宗明は江戸桑名藩の刀工固山備前介宗次のもとで刀剣製作を学び、刀工免許を得たのち一閔藩にもどって藩の刀工として製作を行った。ただし、祖父今野氏が登米領伊達氏に鉄炮製作をもって仕え、父良蔵も一閔藩において御徒士勤務の傍ら鉄炮鍛冶を営んでおり、宗明自身も、刀剣製作に入る前から鉄炮鍛冶を行い、また刀工免許後も藩士の要望に応じて鉄炮製作を行っていたことが分かっている。すなわち、専門の刀鍛冶とは異なり、鉄炮鍛冶としての材料調達を父から引き継いで行っていた可能性がある。



図5a-1 一閔藩の「久保田宗明」製造の鉄砲



図5a-1 久保田宗明



図5b-1 宗明作の短刀



図5b 宗明



0004 20KV X400 10µm WD19

図5a-2 鉄砲の介在物の反射電子像
白色鉱物は鉄酸化物（ウスタイト）
鉄-チタン酸化物鉱物が含まれない



0005 20KV X400 10µm WD49

図5b-2 短刀の介在物の反射電子像
鉄-チタン酸化物鉱物が含まれない

図5 鉄砲鍛冶の系譜を引く製作者が作った鉄炮と刀の
走査型電子顕微鏡分析結果

以上の2組の分析例から見て、鉄炮鍛冶による鉄炮の製作と刀鍛冶によるそれでは、その材料調達の面で相違があり、また刀剣を作る際にも鉄炮を作る際にも共通する材質の材料を使用し、特に使い分けはしていなかったのではないかと考えられる。

* 「宗明」銘短刀と「久保田宗明」銘鉄炮は中鉢弘氏の所蔵資料である。

新会員募集

日本銃砲史学会は火器を中心とする、科学史ならびに軍事史などの研究を行なうことを目的としている。

賛同する研究者の参加をもとめている。

- * 会報誌『銃砲史研究』年4回以上発行、月例会年8回開催予定
(第2土曜予定)
- * 年会費10,000円、例会出席費500円、会報誌郵送代は別途
- * 会員募集連絡所：

〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1

(社)日本ライフル射撃協会内 日本銃砲史学会

電話 03(3481)2389・2390・2391 F A X 03(3481)2392

日本銃砲史学会 入会申込書

平成 年 月 日

〒

氏名

所属機関・職名

TEL

FAX

E-mail

貴学会の主旨に賛同し、入会を希望します。

銃砲史研究

平成16年10月9日 発行

日本銃砲史学会 編集発行

〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1

(社)日本ライフル射撃協会内

電話 03(3481)2389・2390・2391

F A X 03(3481)2392

禁無断転載